

[平成 27 年度 地域創造学賞]

## 大大阪時代における大阪ミナミの都市文化の発展 —第五回内国勸業博覧会を中心に—

寺田 つかさ

### 目次

はじめに

- I. “大大阪”時代以前の大阪
  - I-1. 江戸時代の大坂
  - I-2. 明治初期の大坂
- II. 内国勸業博覧会と大阪
  - II-1. 日本の万国博覧会への参加
  - II-2. 日本における内国博の動向
  - II-3. 内国勸業博覧会開催への大阪の動向
  - II-4. 第五回内国博開催
- III. 大大阪時代
  - III-1. 第五回内国博後の大阪
  - III-2. 大大阪の形成
  - III-3. 大阪市の黄金期—大大阪

おわりに

### はじめに

大阪は江戸時代に「天下の台所」と呼ばれ、商業都市として発達したが、徳川幕府の滅亡により、明治期において一時的な衰退を見せた。しかしながら明治 23 (1890) 年頃より、紡績業を中心とする近代工業が起り、近代都市として発展していった。近代化が進むなか、明治 30 (1897) 年に第一次市域拡張が行われ、大阪市の市域は維新以前の 3 倍半にまで拡張した。

その後、日露戦争、第一次世界大戦を経て市勢発展はさらに急速化し、都市が膨張していった。これと同時に、近代化へのインフラ整備や住宅問題、都市問題も顕著となり、市域拡張や町村編入を求める世論が高まった。これを受けて、大正 12 (1923) 年に大阪市長に就任した関一は、大正 14 (1925) 年 4 月に第二次市域拡張を行った。この市域拡張により、市域は約 3 倍余り、維新以前に比べて約 11 倍に拡張し、人口は約 200 万人以上になった。大阪市は面積・人口ともに日本最大の都市となり、「大大阪」と人々から呼ばれるようになったのである。

本稿では大大阪時代の都市文化の形成について考察していくが、その研究対象として大阪・ミナミを挙げたい。ミナミは現在の南海電鉄難波駅を中心とする地域一帯をさし、心齋橋筋や道頓堀・千日前界限などを含む大阪随一の繁華街である。江戸時代のミナミは「天下の台所」

と呼ばれた大阪の物資輸送網について市内随一の要所であり、心斎橋筋や道頓堀などの運河周辺の街が繁栄した。明治期に入り、近代化が進んでいくに伴い、百貨店や劇場ができるなど、ミナミは大阪の都市文化において、常に先頭に立ち、発展してきた。

以上のことから、本稿ではミナミを研究対象にしたいと考える。また、その都市文化の発展経緯を明らかにするために、明治36（1903）年に開催された第五回内国勸業博覧会（以下、第五回内国博）を中心に考察を進めたい。ミナミにおける都市文化発展の歴史的経緯に検討を加えるとともに、第五回内国博の開催が、大大阪の都市文化の形成にどのような影響を与えたのかを解明していくことが、本稿のねらいである。

まず第一章では、大大阪時代以前の大阪・ミナミについて、江戸期と明治期の二つの時代に焦点を当て、各時代の経済や人々の生活について論じる。この二つの時代を取り上げ、大大阪時代以前から根付くミナミの都市文化について考察していきたい。続く第二章では、明治期における内国勸業博覧会（以下、内国博）の動向及び第五回内国博開催までの経緯と開催時の様相について論じる。さらに第三章では、内国博後から大大阪時代全盛期までのミナミの街の動向から文化の変遷を考察していきたい。最後に、第一章から第三章までの考察を通じ、近世から大大阪時代までのミナミの都市文化の発展から、大大阪時代の都市文化の形成に第五回内国博がどのような影響を与えたのかについて明らかにしていきたい。

## I. “大大阪”時代以前の大坂

大大阪時代という全国一の繁栄を見せた大阪の経済面、文化面において、その基盤が形成されたのは江戸期である。江戸期の大阪は「天下の台所」と呼ばれ、繁栄を誇っていた。本章では、江戸期の大阪の経済状況と文化について取り上げ、大阪近代化への基盤形成の足跡について論じていきたい。

### I-1. 江戸時代の大坂

#### 「天下の台所」

大坂<sup>1</sup>は「天下の台所」と呼ばれた。大坂では淀川や大和川や東横堀川、道頓堀などの堀川<sup>2</sup>のような河川と廻船航路の交わる連結点に位置しており、畿内の町村や京都、瀬戸内海を通じ西国から荷物が運び込まれていた。淀川や大和川では川船・平底船が定期的に航行し、京都で生産された大量の製品や、近郊の東成・西成郡で栽培された野菜、豊島・島下郡から果物や野菜、さらに遠くの紀伊や近江などからの産物も運び込まれた。これらの船は大坂に入ると、茶船や上荷船に積み替えられて運ばれていたが、元和5（1619）年には10石積みの1000以上の茶船と、2倍の大きさの1600近い上荷船が大坂奉行所より営業許可が与えられており、このことから全国から膨大な量の荷物が集まっていたと考えられる。

一方、廻船航路は1670年代初めに開発が行われ、東廻り航路と西廻り航路ができた。特に西廻り航路は徳川の命を受けた河村瑞賢により開発された。瑞賢は危険水域を地図に示し、狼煙台や灯台を建てた。さらに大坂から瀬戸内海、日本海を北上する全沿岸線に難船救助のための施設を設けた。また、同様の設備を大坂・江戸間の太平洋沿岸にも設け、航路の設備を安全なものに整え、海上インフラの整備に努めた。

大坂にはこのような交通路を通じて、近郊の農村や諸国から様々な荷物が運び込まれ、そ

れを江戸に供給するための中継地として、全国的な市場取引の中で重要な役割を担っていた。一方、江戸は世界最大の都市に成長していくと同時に、住民は食料品や日用品を近隣の地域だけでなく、畿内・西日本の農村や手工業産地に依存するようになっていった。実際に正徳4(1714)年の「正徳四年大坂移出入品表」<sup>3</sup>からは、米・菜種・塩などの食料・嗜好品、白毛綿・絹などの衣料、材木・紙・鉄などの鉄銅品・材料、炭・和漆などの日用品など、かなり広範囲の商品が大坂に集められ、その多くが江戸に送られていることが見てとれる。このことから、大坂が江戸の人々の生活を支えていたことが明らかであり、「天下の台所」といわれた所以であるともいえる。

### 心齋橋筋の賑わい

現在の「心齋橋筋」というと、通りの途中に大丸のある商店街があり、その範囲は道頓堀の戎橋から長堀通(昔の長堀川)までで、船場は含めずにイメージされる。しかし、文化3(1806)年に記された「増修改正撰州大阪地図」においては、淀屋橋より一筋東の土佐堀川近くに「シンサイバシスヂ」と記されているように、本来は道頓堀から心齋橋を経て土佐堀川に至る街路を指し、船場も含んでいたのである<sup>4</sup>。江戸期の心齋橋筋における発展には新町が深く関わっている。新町とは、江戸の吉原・京都の島原と並ぶ三大遊所の1つであり、寛永期に道頓堀や阿波座などに散在していた遊女町を集めて作られた。当初は出入り口が西側のみであったが、明暦3(1657)年に東の大門、寛文12(1672)年に船場との往来のための新町橋が西横堀川にでき、延宝4(1677)年には夜間営業が許可されたことで、さらに発展していった。

新町橋ができた同時期、順慶町通<sup>5</sup>に夜店が並び始めた。秋里籬島が著した『撰津名所図会大成』(田村九兵衛,1798年)には、「夕暮より万灯でらし種々の品を飾りて、東は堺筋、西は新町橋まで、両側尺地もなく連なりける」<sup>6</sup>とあり、通り全体が行灯をつけた夜店で賑わっていたと分かる。夜店では綿布や呉服といった着物、家具や金物などの日用品、袋物や小間物入れ、野菜や菓子など、様々な物が商品として扱われた<sup>7</sup>。やがて1800年代中頃になると、心齋橋筋にも夜店が広がり始め、賑わいを見せ始めた。暁鐘成の著した『浪華の賑ひ』(河内屋喜兵衛,1855年)において、「今は心齋橋すぢより南へつづきて島の内及び道頓堀戎橋まで夜店ありて、年年に賑はひを増せり」<sup>8</sup>と記されていることから、そのことは明らかである。

この賑わいの背景には、道頓堀に浄瑠璃や歌舞伎など芝居小屋が立ち並ぶようになり、人々が南へと移動し始めたということがある。心齋橋筋は道頓堀や新町という賑わいの町へ出向く人々の通り道として、人や夜店で賑わい、繁栄していったのである。

しかし、心齋橋は夜だけが賑わっていたわけではない。『撰津名所図会大成』(秋里籬島,同書)において「当橋條といふハ南ハ道頓堀戎橋にして浪花第一の繁花なれば、昼夜を分たず往来街に充満せり」<sup>9</sup>と記されているように、昼も人や商店で賑わっていた。江戸後期になると、筋には着物や日用品を売る商店だけでなく、蕎麦屋や魚料理、饅頭屋など食べ物屋が多く立ち並んだ。また船場・島之内を通じる筋には特に本屋と昆布屋が特に多かった。本屋は50店以上あり、出版物の発行や様々な書籍が販売された。このように、心齋橋筋は庶民が買い物や食を楽しむ街として、大坂随一の繁華街になったのである。

## 幕末の大坂

江戸後期になると、安政元（1854）年の日米和親条約、続く安政5（1858）年に調印された日米修好通商条約締結によって、200年余り続いた日本の鎖国政策は終わりをつげ、開国することになった。修好通商条約では、協定関税制や領事裁判権などの不平等な条件を認めさせられた。さらにこれらの条約の締結により開港が求められ、これによって物価高騰と攘夷運動が起こった。日本は「内憂外患」の時期を迎えたのである<sup>10</sup>。

大坂にも「内憂外患」の波が押し寄せてきた。開国以後、攘夷派と徳川幕府軍の間で争いが勃発した。この時、徳川幕府側の大軍が大坂に長期滞在することがあり、これにより物価の値上がりが生じ、都市では生活に困窮した人々による打ちこわしが起こった。また慶応3（1867）年9月には「ええじゃないか踊り」<sup>11</sup>という、富豪や店に乗り込んで飲食を要求するという騒ぎが起こった。

大坂経済に最も大きな打撃を与えたものが、明治元（1868）年5月9日に布令された銀目廃止である。これにより銀切手が使えなくなるという風聞が流れ、両替商に取り付け騒ぎが頻発し、資本銀以上の信用創造している両替商は換金不能となって破産閉店に追い込まれた。

これまで論じてきたように、大坂が「天下の台所」と呼ばれたのは、河川や廻船航路の連結点として、全国各地から多種多様な商品が出入りし、江戸庶民の生活を支えていたためである。さらに運び込まれた商品は心齋橋筋で売られ、人々は買い物や食を楽しんだ。心齋橋筋は江戸期にはすでに大坂随一の繁華街として繁栄していたことが分かる。

### I - 2. 明治初期の大阪

本章では幕末になり、衰退してしまった大坂が、いかにして近代化や経済の復興を遂げたかについて取り上げ、明治期の大阪がどのような都市であったのかを論じていきたい。

#### 大阪市における近代化

明治初期の大阪<sup>12</sup>では新しい時代が始まろうとしていたが、街は未だ、江戸時代の面影を残していた。

江戸時代において、大坂市中は大坂三郷と呼ばれ、天満組、南組、北組の3組に分けられた。明治維新でもこの3郷620町をそのまま大坂市中としたのである。明治初期の市中は「北を土佐堀川、南を道頓堀川、東を横堀川、西を木津川に囲まれた地域を中心に、北西部の湾曲する淀川に囲まれた区域から、堂島、中之島にかけて北区があり、中之島の西端から今の弁天埠頭付近までの安治川の両岸が、象の鼻状に西区の区域に入り、東は大阪城がすっぽり東区として入る」<sup>13</sup>範囲であった。この市域の周辺はすべて村であり、新しく開発された新田があった。村では、「ひろびろとした田んぼや畑の中に森と農家が点在し、農民が汗を流して牛を追い、鋤を打ち、ざくざくと音をたてながら稲を刈っている」<sup>14</sup>という光景が見られた。

大阪市が発足するのは、明治22（1889）年のことである。明治政府は本格的な地方制度として市制町村制を明治21（1888）年4月に公布し、翌年4月に施行した。この法律に基づき、東・南・西・北の4区を市域として大阪市が発足したのである。しかし、大阪市では特例が適用されたことにより、それぞれの府知事・書記官が市長・助役の職務を任せられ、市役所はない状態であった。大阪市において他の市と同じように市長・助役が選出され、市役所が建てられたのは明治32（1899）年10月のことであった<sup>15</sup>。

## 明治初期の大阪の経済発展

明治初期の大阪の経済は、銀目の廃止、御用金、蔵屋敷の廃止などにより、経済的に大きな打撃を受けた。また、大名貸しを行っていた両替商たちは、廃藩置県によりさらに苦境に陥った。このような状況にあった大阪の経済を復興させようとしたのが、五代友厚（1835-1885）<sup>16</sup>である。五代は金銀分析所をはじめ、鉱山の開発、大阪株式取引所の創立、大阪商法会議所の組織を行うなど、新しい時代に即応した事業を展開し、大阪の企業活動の先駆者となった。株式取引所や商法会議所の設立は事業活動の展開の上においても重要視され、将来を見据えて準備が進められたのである。このような活動を通じて、五代は大阪経済の指導者という大きな役割を担っていくことになる。

また、明治10年代半ばから20年代前半にかけて、大阪では急速に工業化が進んだ。特に発展した工業は紡績業である。明治3（1870）年には、薩摩藩により大阪最初の紡績業である堺紡績所が操業し、続いて明治12（1879）年に渋谷紡績所が作られた。明治16（1883）年には渋沢栄一（1840-1931）<sup>17</sup>が設立した大阪紡績会社が創業し、民間工場では初めての発電機が導入され、夜業も行われた。さらに明治20年代になると、市街地周辺に紡績工場が次々と建つようになったことで、大阪は紡績産業の中心地となったのである。

## 大阪と文明開化

すでに述べたように、安政5（1858）年にアメリカ、イギリス、フランス、ロシア、オランダと修好通商条約が締結されたことにより、日本に対して開港・開市が求められた。大阪は当初、開市地であったが、慶応4年（1868）年7月15日に開港地と改められ、外国の船舶が川口波止場に乗り入れるようになった。これらの船から蝙蝠傘や帽子、シャツ、洋服、洋紙など様々な物資が荷揚げされ、市内に出回った。さらに同年7月29日に港近くの旧夷島<sup>18</sup>の先端に川口居留地<sup>19</sup>や、雑居地が隣接して設置され、多くの外国人が住むようになると、周辺に西洋料理店や散髪屋、写真館、洋品店などが開店し、新しい商売が始まったのである。

文明開化期の大阪で、大きく変わったのは交通面であった。まず登場したのが蒸気船である。大阪で初めて蒸気船が運航するのは明治2（1869）年のことで、グラバー商会のスタンチ号が大阪－兵庫（神戸）間で運航した。明治3（1870）年頃、この蒸気船は京都（伏見）－大阪（八軒家）間でも運航するようになり、川蒸気と呼ばれた。これは明治9（1876）年に京都－大阪間で鉄道が開通すると、やや勢力を失ったが、明治43（1910）年に京阪電気鉄道が開通するまでは淀川交通として重要な存在であった。

これに対して登場したのが、陸蒸気と呼ばれた官営鉄道である。明治政府は鉄道事業を重要な施策の一つとして位置づけ、明治3（1870）年に、イギリス人技師のモレル（Morel Edmund:1841-1871）<sup>20</sup>を雇い、本格的な敷設事業を始めた。大阪の鉄道敷設は横浜－新橋間に次いで手掛けられ、明治7（1874）年5月に大阪－神戸間、明治9年に大阪－京都間で開通した。大阪駅は市街地ではなく、西成郡北野村曾根崎に造られた。赤煉瓦2階造の建物は「大阪ステーション」と称され人気を集めた<sup>21</sup>。また人力車も登場し、明治36（1903）年に巡航船と市電が開通するまで隆盛を極めた。

文明開化により市街地でも変化が起こった。造幣局や大阪府庁、大阪駅などの官公庁では洋風建築が多く建てられた。また、明治3年9月には、大阪初の鉄橋である高麗橋や、明治5（1872）年には大阪初の無脚鉄橋である新町橋など、鉄橋も次第に多くなっていったので

ある。明治20年代頃になると、第一国立銀行大阪支店や第四百四十八国立銀行本店などの金融機関や、洋服屋、時計屋のような商店でも洋風建築が見受けられるようになった。さらに、ちょんまげの廃止や肉食の流行など、人々の生活様式にも変化が見られるようになった。街では洋装の人々も増えてきたが、官吏や軍人が中心で、庶民にはまだ広まっていなかった。

### 明治初期のミナミ

ミナミでは、島之内・心齋橋筋・道頓堀などが商業地化・遊樂地化が進み、また運河網が密集する交通の要所であり、多くの人で賑わっていた。明治期に入り、ミナミは大阪の近代都市への発展を支えた。

大阪が近代都市となっていく一つの構成要素として、鉄道が挙げられる。明治7（1874）年に曾根崎という大阪北部の市街地に、官営鉄道の大阪停留所ができた。しかし、曾根崎は大阪北部の市街地のはずれにあり、この駅を含む周辺地域、すなわち、キタはまだ十分に開発されてはいなかった。キタの発展は、この曾根崎駅の完成を契機に始まったのである。

鉄道という新しい交通機関のメリットを知った有志家たち<sup>22</sup>は江戸期から繁栄してきたミナミに目をつけた。有志家たちは経済的・文化的にも十分な発展を遂げていたミナミをさらに近代都市へと導いていくために、いち早く鉄道ターミナルを設け、私設鉄道<sup>23</sup>を開業したのである。

江戸期において大阪随一の繁華街であった心齋橋筋は、明治期に入っても、変わらず大阪随一の賑わいを見せていた。明治6（1873）年に文明開化の象徴ともいえる鉄橋の心齋橋が建設され、心齋橋筋も新しい時代を反映した街並みとなっていった。

心齋橋の街の様子について、『商工案内 浪華の魁』（垣貫與祐,1882年）には、外国からもたらされた西洋時計や蝙蝠傘などの新時代の物品を扱う商店が描かれている<sup>24</sup>。また、西口忠は『上方おもしろ草紙』に収められている、明治28（1895）年頃の心齋橋末吉橋から北久宝寺までの北詰における商店の配置図を挙げ、「198軒（空地を含む）の内、書林が20軒、舶来物品商が15軒、時計商が18軒、靴・カバン商が10軒、洋傘商が11軒、洋反・洋服商が5軒など」<sup>25</sup>があったと指摘している。このことから、心齋橋筋には西洋文化の商品を扱う最先端の商店があり、文明開化が市民へ浸透していった様子が読みとれる。

明治期に入っても賑わいを見せた心齋橋筋であったが、特に賑わいの中心になっていたのは心齋橋以南、戎橋までの間の地区であった。この地区は小売専門の区域であり、大丸、小大丸、十合などの呉服店を中心に、履物屋、小間物屋、半襟屋など、女性向けの物品を扱う商店が多く占めた。また、洋傘や帽子など新時代の商品を出す商店も並んだ。女性向けの装飾品を出す名店が軒を連ね、和洋の流行を発信する最先端の街であったことが伺える。

これまで述べてきたように、幕末期に衰退のかげりを見せていた大阪は、明治期に入ると次第に活気のある都市に変貌していった。経済復興をめざし、新しい時代に適応した事業展開や、紡績業を主とした工業化が進んだことで、大阪の経済は著しく発展した。また文明開化により、洋風建築、洋装、西洋料理などが浸透し、街の至る所で西洋文化が見られるようになった。大阪は近代都市として整備され、関西の経済・文化の中心として発展していくことになる。

次章では、大阪がさらなる経済発展の手段として取り組んだ内国博覧会について論じていきたい。

## II. 内国勸業博覧会と大阪

先に述べてきたように、明治初期の大阪は文明開化や工業発展により、目覚ましい経済発展を遂げた。大阪は近代都市としてさらなる発展を目指し、内国勸業博覧会の開催に向けて誘致運動を展開していく。本章ではまず、日本における博覧会への参加、そして内国博開催までの過程を取り上げ、大阪における内国博開催の意義について明らかにしたい。次いで内国博開催までの大阪の動向、内国博の内容について取り上げ、第五回内国博とはいかなるものであったか、その開催によって、大阪でどのような変化があったかについて検討を加えたい。

### II-1. 日本の万国博覧会への参加

#### 江戸期の万国博覧会への参加

第一回目となる万国博覧会（以下、万国博）は、嘉永4（1851）年にロンドンで開催された。造園家ジョセフ・パクストン（Sir Joseph Paxton, 1803-1865）が設計した巨大な鉄とガラスの構築物である「クリスタルパレス（水晶宮）」が会場となり、封筒製造機、輪転機による大量印刷の実演など数多くの機械が展示され、イギリスの工業力が人々に誇示されたのである。この第一回万国博開催後、世界各国で万国博が相次いで開催された。

日本製品が初めて万国博に登場したのは、嘉永6（1853）年のダブリン万国博である。しかし、この万国博では既に現地にあったものを展示しただけで、日本は直接万国博と関わっていなかった。日本人と日本製品が直に博覧会と関わるようになるのは、文久2（1862）年のロンドン万国博からである。この当時、江戸幕府はオランダ、ロシア、イギリス、フランスと締結した修好条約によって、兵庫、新潟の開港と江戸、大阪の開市を迫られていた。そこで、竹内下野守保徳を正使に、福沢諭吉、福地源一郎、松木弘安らを随行とする使節団を派遣し、開港・開市の期日の延期について交渉しようとした。彼らは文久2年1月に江戸を出発し、5月1日にイギリスに到着した。そして翌日に開かれたロンドン万国博の開会式に着物姿で出席し、その姿はロンドン市民の注目を集めた。使節団の一人だった福沢は慶応2（1866）年に『西洋事情』を著し、その中の「博覧会」という項で、「（前略）西洋の大都會には、數年毎に産物の大會を設け、世界中に布告して各々其國の名産、便利の器械、古物奇品を集め、萬國の人に示すことあり。之を博覧會と稱す」<sup>26</sup>と記録している。福沢によって、日本国内に広く博覧会が紹介されたのである。

日本からは、イギリスの初代駐日総領事のオールコック（Sir Rutherford Alcock, 1809-1897）が収集していた陶器、漆器、七宝、金細工、甲冑刀槍類など900点近くの品々が展示されたが、これらはあくまでオールコックの日本コレクションにすぎなかった。しかし、現地では使節団の存在により日本への関心が高まっていたことから、ロンドン市民のエキゾティシズムを刺激し、好評であった。

日本が正式に参加し、出品物を展示したのは、慶応3（1867）年のパリ万国博である。幕府はフランス公使ロッシュ（Léon Roche, 1809-1901）の勧めにより、陶器、漆器、金細工、浮世絵、和紙、鋳物など、日本の特産品を幅広く集め、徳川昭武を代表とする遣欧使節団を派遣した。また佐賀藩と薩摩藩も独自の出品を行った。この時、佐賀藩の事務官庁としてパリに派遣されたのが佐野常民であり、後に明治政府の博覧会行政の中心を担うようになった。

## ウィーン万国博への参加

明治維新後、新政府として初めて参加したのが明治6（1873）年のウィーン万国博である。

明治5（1872）年5月、博覧会事務の実質的な責任者となった工部大丞・佐野常民（1822-1902）は、ウィーン万国博の参加目的として、(1) 精良の品を収集・展示し、日本の国土の豊穡と人工の巧妙を海外に知らせること、(2) 西洋各国の物産と学芸の精妙を看取し、機械技術を伝習すること、(3) 日本でも博物館を創建し、博覧会を開催する基礎を整えること、(4) 各国で日本の製品が日用の要品となって輸出増加をもたらす糸口をつかむこと、(5) 各国の製品の原価・売価や欠乏需要の品を調査し、今後の貿易の利益のすること<sup>27</sup>の5点を掲げた。(1)の目的実現のため、展示のジャポニスム志向が図られた。すなわち、明治政府はお雇い外国人ワグネル（Gottfried Wagener, 1831-92）の指導の下、全国から収集した陶磁器や織物など美術工芸品を中心に、名古屋城の金のシャチ、鎌倉の大仏を模した張子の大仏、五重塔の模型などを出品すると同時に、会場内に神社と日本庭園を組み合わせたようなパビリオンを設計するなど、日本の伝統的文化を前面に押し出した展示を行ったのである。

また(3)の目的からは、明治政府が後に日本で国内博覧会を開催するために、ウィーン万国博を模範にしていたことがわかる。この万国博には博覧会事務局だけでなく、条約改正のために欧米諸国を巡回していた岩倉使節団も訪れていた。その一員である久米邦武は、明治11（1878）年に著した『米欧回覧実記』において、次のように記している。すなわち、博覧会とは「国々が物産を持ちよって大きな建物の中に陳列し、多くの人に見せて、各国の経済事情や農産事情、好みの傾向、風俗習慣などを知悉させ、一つには出品者が自らの製品を展示することにより、評判を高めて取引の拡大を求め、息の長い利益を得ようと図り、一つには他者の製品を見て、自分の製品の弱点を知り、今後の改善点を考え、人々の好みに沿って製品を作ることで、自らの経済活動を広げる目的を達することが出来る。さらに名高い人に評価してもらい、その批評を取り入れてますます進歩するための手掛かりを掴むにもいい。そこで、貿易や工業生産の盛んなことを広く世に示すには大事な場であって、国民生活の充実や安定のためにもなる催しなのである」<sup>28</sup>とある。博覧会を殖産興業や富国強兵のために重要な柱であると考え、この万国博を通じて多くを学んでいることが明らかである。

また佐野もオーストリアからの帰国後、明治8（1875）年『奥国博覧会報告書』をまとめた。その中の博覧会の部に付された意見書で、博覧会は博物館と同じ主旨をもつものとし、その主旨は「眼目の教え」により人智・産業を開進することにあると述べた。そして佐野は、イギリスのサウスケンジントン博物館を模倣して、「眼目の教え」を授ける場として大博物館、芸術・工業の伝習場として「術業伝習場」を地方の支館に付設することを提案した。つまり、展示施設と実習施設を併置することで、産業発展に貢献しようとしたのである。また、博物館周辺を公園にして動植物館を設置することで、訪れた人々を博物館へと誘引し、知らず知らずのうちに「眼目の教え」を授けようとしたのである<sup>29</sup>。さらに佐野は博覧会の利点として、(1) 博覧会の開催が決定すると出品希望者が奮起し、利益を得ようとして技術を磨く、(2) 天下の産物を居ながらにしてみるができる、(3) 未知の物品とその利用法を知ることができる、(4) 国内外の物品を比較し、これを改良に活かすことができる、(5) 各国の土壌の肥瘦や物産の異同・多寡を知ることができる、(6) 各国の風俗や開化の優劣を観察できる、(7) 外国人が機械を出品すれば、日本において機械技術を開く端緒となる、(8) 外国人が日本の産物を交換、購買する、(9) 輸出が増進する、(10) 博覧会の出品から適当なものを選び、博



物本館、支館に納めることができる<sup>30</sup>と掲げ、その上で、明治13(1880)年に上野で国際博覧会を開催すべきであると提言した。このように、明治政府は内国博を開催する前に博覧会の何たるかを学び、殖産興業の重要な政策の一つとして、内国博開催の実現を目指したのである。

## II-2. 日本における内国博の動向

### 明治初期における博覧会の開催

第一回内国勸業博覧会(以下、第一回内国博)が開催されたのは明治10(1877)年であるが、これ以前にも「博覧会」が各地で開催されている。例えば、京都では明治4(1871)年に、東京に遷都したために衰退した京都経済を立て直すために博覧会が行われ、その後毎年開催された。京都以外にもさまざまな地方で毎年博覧会が開催されていた<sup>31</sup>。しかし京都での博覧会を除き、多くの地方における博覧会は江戸時代の開帳<sup>32</sup>や薬品会<sup>33</sup>、あるいは見世物に近いもので、博覧会の本来の趣旨である「出品物を展示・比較して評価する」ということは行われていなかった。

### 内国博開催への明治政府の動向

明治政府は、日本を欧米列強諸国に肩を並べるような強国にするため、富国強兵・殖産興業が近代化政策の重要な課題として考えていた。具体的な政策として、江戸幕府や諸藩から引き継いだ鉱山や工場の官営事業化や、富岡製糸場のように欧米から機械・設備を輸入し、外国人技師を招いて官営工場が設立され、経営が行われた。しかし内務卿・大久保利通は工場の建設だけでなく、実際に生産現場に関わる人々の意識を改革しなければ国内産業の増進が図れないと考え、その改革実現のための重要な政策として内国博の開催を決めた。明治9年(1876)年2月に太政大臣・三条実美に提出した建議書では、博覧会の本旨を「万物を遺類なく一場間に蒐集し、素性物は質の良否を調し、人工は巧拙を査し、識者之れを評論し、百工相見て互いに自ら奮励し、商売は販売交易の途を開く」こととしている<sup>34</sup>。このことから大久保が殖産興業を進めるにあたっては、まず全国からモノを集め、それを分類し、広く国民に展示することから始める必要があると考えていたことが見てとれる。さらに大久保は明治10(1877)年に初の内国博を開くことを提案し、その開催に向けて明治政府は出品物の収集などの準備を進めていったのである。

### 第一回内国博の開催

第一回内国博は東京・上野公園で明治10(1877)年8月21日から11月30日まで開催された。会場には美術本館、農業館、機械館、園芸館、動物館が建てられ、公園入口には約10メートルのアメリカ式の風車が建てられた。また会場内の売店や噴水池の周囲など会場の至る所に提灯が設置され、夜は火が灯り、華やかさが醸し出された。

内国博ではその回ごとに来場者に見物をする際の注意書が配布された。第一回内国博の注意書には「内国勸業博覧会の本旨たる、工芸の進歩を助け、物産の貿易の利源を開かしむるにあり。徒に戯玩の場を設けて遊覧の具となすにあらざるなり」と、博覧会と戯玩の場、つまり開帳や見世物とを峻別するところからはじめられている<sup>35</sup>。そして、この博覧会見物の要点は物品の比較とし、人々にモノの品質、調整、効用、価値、価格に基づいて比較し、評

価することを促したのである。したがって明治政府は第一回内国博においては娯楽の空間をつくるのではなく、人々に展示品を比較・選別するための「眼目の教」を授ける空間を演出しようとしたことが明らかである。

さらに明治政府は「眼目の教」を授けるため、比較と選別を容易にできるような方法で会場全体を構成した。第一回内国博では鹿児島を除き、北は北海道開拓使から南は琉球藩まで全国から出品物が集められた<sup>36</sup>。そして出品物は鉱業・冶金術、製造物、美術、機械、農業、園芸の6部門に分類され、それらが館別に展示され、府県別に陳列された。この展示方法は府県間での競争を促すこととなった。またこの展示方法は日本という国家領域を表し、入場者に対して自身が属する国家を地理的に認識させ、日本国民としての自覚を強く促すことにも繋がったのである。

第一回内国博は約45万人の人々が訪れ、11月30日に閉会した。高村光雲（1852-1934）<sup>37</sup>の回顧録である『幕末維新回顧録』では、「(前略) 最初博覧会というものが何のことであるか一切分らなかった一般市民も、これです、博覧会のどんなものかを知りましたと同時に、また出品人の中でも、訳が分からなくなって、面倒がったり、困ったりしたものも、大きに了解を得、『なるほど、博覧会というものは、好い具合のものだ』など大いに讃辞を呈するというような結果を生じました」<sup>38</sup>と記されている。このことから、国民に博覧会が商品の宣伝の場であることや、全国から集められた出品物を比較検討し、改良方法を探り出すための会であるということが認識されたということが明らかとなろう。

## 第二回内国勸業博覧会の開催

第一回内国博後、大久保は博覧会事業の継続と発展を企図し、内国博を4年に1回開催することを決めた。次に内国博が開催されたのは明治14（1881）年である。第二回内国勸業博覧会（以下、第二回内国博）もまた上野公園で開催された。会場には本館のほか6館が設立され、鶴の噴水や猩々の噴水が話題となった。会期全体の入場者は82万人余りと第一回よりも増し、上野周辺の店は大繁盛した。また『読売新聞』（明治14（1881）年4月19日、5月3日）には入場者の中には上野見物だけでなく、横浜・横須賀まで足を伸ばす者も多く、新橋・横浜間の鉄道や横浜・横須賀間の汽船が大繁盛する<sup>39</sup>など、第2回内国博の開催によって、会場の周囲に大きな経済効果をもたらされたことが明らかである。

出品物に関しては、まず展示は第一回と同様に分類が行われたが、出品物の比較をさらに容易にするため、通路が縦横に通され、横軸は府県別、縦軸は部類別に展示品が配列された。出品数については、出品者・出品点数とともに、第一回と比べて上回ったが、機械は5点しか増えず、第一回に出品されたガラ紡も再び展示されるなど、目新しさには欠けるものとなった。

## 第三回内国勸業博覧会の開催

第三回内国勸業博覧会（以下、第三回内国博）は明治23（1890）年4月1日から7月31日まで上野公園で開催された。出品物に金色の皿やコーヒー茶碗など前2回の博覧会にはなかった西洋風の製品が登場した。またアメリカから輸入されたスプレーグ式電車2両が会場内で運転され、話題となった。

入場者数については、衆議院選挙や流行病などが起こり、入場者数が落ち込む時期もあったが、最終的に総入場者数は100万人を突破した。第二回は第一回と比べて1.8倍の入場者

数を記録したが、第三回は第二回の1.2倍にとどまった。衆議院選挙や流行病などを考慮しても、内国博は民衆に飽きられてきたと考えられる。このような事態に対して、マスコミは内国博に娯楽要素を加えるべきだと主張した<sup>40</sup>が、明治政府は博覧会について、「歓楽場」ではないという考えを変えることはなかった。

#### 第四回内国勸業博覧会の開催

内国博は第一回から第三回まで東京で開催されたが、地方も内国博によって開催地の経済が潤うことに注目しはじめ、第四回内国勸業博覧会（以下、第四回内国博）については大阪と京都で誘致運動が起こった。明治25年7月に農商務大臣に就任した佐野常民は、第四回内国博は京都、第五回を大阪で開催することを提案したが、誘致運動は収まらず、さらに東京も内国博の移設反対を表明したことで3都市が候補に挙がった。京都側は大阪・東京に対抗するため、内国博が持つ国家的祝祭という側面に注目し、誘致運動を有利に進めようとした。つまり、京都側は第四回内国博の開催が予定されていた明治27年（1894）年が平安遷都からちょうど1100年経つことから、内国博と同時に遷都千百年記念祭の開催を提案したのである。その後、記念祭に加え、会場を無料提供することも提案したことで、第四回内国博は京都で開催することとなった。

明治28（1895）年4月1日、京都・岡崎で第四回内国博が開催された。開催に合わせて、京都の社寺72ヶ所で桓武天皇法要や開帳、宝物・社殿拝殿など様々な行事が催された。ただ日清戦争中により、人々の間で観覧を自粛する風潮があったため、開催直後は入場者の出足が鈍かった。その後、4月17日に日清講和条約が締結されると、徐々に入場者も増加し、4月後半には絶頂を迎えた。しかし、5月にコレラが流行し、さらに農繁期に入ったことから、入場者数は5月から減少し続けた。この不振を挽回するため、6月中旬から会場付近の売店が共同して花火や祇園囃子などを催し、京都電気鉄道が夜間運転を始めた。これらによって夜間の人出は増えたが、夕方に閉場する博覧会の入場者数の回復には繋がらなかった。

また、電信機や電話機、発電機、アーク灯などが出品され、動力が従来の石炭から電気に変わったことが証明された。しかし、機械の部全体で見れば出品数も減り、話題となる品も少なかったことが第四回内国博の不振の一因となったといえる<sup>41</sup>。

以上のことから、第四回内国博については、入場者数は前回を超えたものの、従来の内国博と比べて盛り上がりには欠けたため、今後の内国博運営を見直す必要に迫られたのである。

### II-3. 内国勸業博覧会開催への大阪の動向

#### 内国博の誘致運動

すでに上記で述べたが、大阪が博覧会開催のため誘致運動を行ったのは第四回内国博の時である。明治25（1892）年2月、堺商業会議所は博覧会が毎回東京で開催されることに不満を抱き、次回は大阪で開催するように農商務大臣に建議した。これに呼応するように大阪商業会議所による本格的な誘致運動が始まったのである。その同年5月に、京都が誘致運動に乗り出し、大阪も誘致運動を展開した。『大阪朝日新聞』（明治25年6月1日付）において「地形はさらなり。商工の繁盛、運輸の利便、凡そ此等の上に就きて観察を下せば、第四回勸業博覧会は我大阪に於て開会せんこと最も適当なり」<sup>42</sup>とあるように、大阪の誘致運動は、大阪が経済の中心であり、商都であることを強調した積極的なものであった。

同年7月、農商務大臣・佐野常民によって、第四回内国博の開催地は京都に決定されたが、大阪の誘致運動は収まらず、大阪商工会議所をはじめとする民間団体から請願が多く出されるなど、さらに過熱していった。しかし、京都府知事からの京都開催の請願書、さらには農商務大臣と次官から京都開催の旨を打電され、大阪は第四回内国博の開催を諦めるに至ったのである。

次に大阪が内国博の誘致のために活動を始めたのは、明治32（1899）年のことで、五回目の内国博のときである。前回は大阪・京都・東京の3都市が誘致運動を行うのみであったが、第五回内国博は大阪・東京・名古屋・仙台など多くの都市が誘致を目指していた。大阪は諸都市に対抗するため、この年に商業会議所が中心となり、会頭・土居通夫を会長とする誘致期成同盟会を結成した。そして、約3,000人の署名を集め、「明治参拾五年ヲ以テ内国勸業博覧会ヲ大阪ニ開催セントスルコトヲ希望スル請願書」を貴族院議長・近衛篤磨宛に提出するなど、積極的な誘致運動を展開した。同年2月20日の衆議院本会議において、大阪と東京の2都市から開設の建議が提出され、最終的に5月10日に、府知事から大阪に内定されたと市会に連絡があり、第五回内国博の開催が正式に決定したのである。ただし、開催には「博覧会用トシテ敷地九万坪以上及之ニ通スル一条ノ大道路ヲ要シ且ツ樹木ノ植付等ノ準備ヲ必要トス。凡此等ノ費用ハ大阪市ニ於テ負担」<sup>43</sup>という条件が付されていた。

## 開催地の選定

第五回内国博の開催地に決定した大阪は、具体的にどの地域で開催するかを選定する必要があった。明治32（1899）年6月6日、大阪市会が市民から申し出のあった各候補地について調査委員会を設け、その適否を調査した。そして7月31日の大阪市会で調査報告が行われ、大阪南部にある西成郡今宮村付近の地域で、今宮村の南海鉄道以西の地・四天王寺東門・茶臼山付近の3ヶ所が候補地として挙げられた。しかしながら、これらの候補地には敷地買収費、道路開鑿などを含めた工事費について、大阪市に大きな負担がかかるという難点があり、候補地することが躊躇されていた。

このような事態の中、新たに候補地として挙げられたのが、西区の北福崎であった。北福崎は大阪市にとって有利な三つの条件を有していた。つまり一つには、大阪湾に近接しているため、淀川の水運の便に優れ地の利を得ていたこと、もう一つは、土地の寄進者が現われたことにより、会場となる土地の一部をその寄進地で賄えたこと、さらには、土木工事費も他の3ヶ所に比べて格安であった、ということが挙げられる<sup>44</sup>。これらの条件から、調査委員会は北福崎を候補地に選定し、市会に提案した。市会では北福崎の適否について議論がなされたが、新聞報道による調査委員会委員の買収疑惑や、農商務省が茶臼山付近での開催を既に決定していたという情報が流れたことや、各地域の利害の錯綜などの要因で、会議は紛糾した<sup>45</sup>。結局、市会において開催地を1ヶ所に選定する結論には至らず、北福崎・茶臼山・今宮村・四天王寺東門・桃山付近の4ヶ所の内から、農商務大臣に開催地を選定してもらうことになったのである。そして結果的に、市の南端地域である天王寺今宮（茶臼山付近）が開催地として選定され、この地帯に向けて、道路などの交通網の整備が急速に進められていったのである<sup>46</sup>。

### 第五回内国博に関する機関の設立

第五回内国博の開催地に決まった大阪は、博覧会を盛況に導くために準備を進めた。第五回内国勸業博覧会協賛会（以下、博覧会協賛会）が明治36（1903）年に発行した『大阪と博覧會』（第五回内国勸業博覧会協賛会、1903年）の中の「博覧會に就ての大阪」の項において、次のように記されている。すなわち、大阪市は「市費は百餘萬圓を投じ、夙に博覧會委員會なるものを設けて、敷地の買取道路の擴張を始め、博覧會に關する幾多の經營に盡瘁し」<sup>47</sup>とあり、また大阪府も、「三十三年度より三十六年度に亘る繼續費貳萬千六百九拾餘圓を出して博覧會準備の事業をなし別に三十四、五兩年度に壹萬五千三百餘圓を出して陳列棚、陳列臺調製費、集談會費其他に宛てて出品の獎勵を勉めた」のである<sup>48</sup>。

これら以外の博覧会に関する機関としては、まず、明治33（1900）年に大阪市内の官民間の有力者で構成される博覧会協賛会が設立された。協賛会は有志から募金を集め、「一は内外來觀者の便利と愉快とを増し、一は大阪の特長を他に紹介して永久の實益を加へんがために、諸般の設備に汲々」<sup>49</sup>したのである。また「商工各當業者に出品の獎勵をなし、共同賣店を企圖」<sup>50</sup>して大阪出品協会が設立された。明治33（1900）年の初夏に、大阪出品協会は市役所・博覧会協賛会などとともに、パリ万国博の会期中に市内各所で催された幻燈会を訪れ、これにより「大に對博覧會の觀念を鼓舞」<sup>51</sup>させた。さらに「待賓有志會の應援を得て、來遊外人に便宜を與へんことを勉め」<sup>52</sup>た貴賓会大阪支部、博覧会協賛会の監督の下で「市内の確實なる旅宿營業者團結して旅客の待遇を懇切にし」<sup>53</sup>た大阪旅客協会、「博覧會を機として従來の弊風を一洗」<sup>54</sup>することを目的にした大阪商店改良会が次々に設立された。こうして、第五回内国博の準備は官民一体となって行われていったのである。

### 娯楽としての博覧会へ

明治33（1900）年に設立された博覧会協賛会は、案内記の編纂、貴賓接待、交通・宿泊整備、近隣府県のイベント開催、学芸・実業大会開催、そして興行場の設置などを業務としていた。第五回内国博において興行場を設置することに決まったのは、第四回内国博の不振を受けてのことである。京都のように多くの寺社仏閣が集まる魅力的な都市であっても、内国博の入場者数は思いのほか、伸び悩んだ。これを受けて博覧会協賛会は、大阪が京都に比べて客を誘引できるような魅力に乏しいと考え、新たな誘引装置の導入、つまり興行場の導入を決定したのである。

博覧会協賛会の初代会長を務めた土居通夫は、明治33年4月に政府からの命令でパリ万国博の視察に向かった。当時、欧米で開催されていた万国博でも入場者数や入場料収入が伸び悩み、会場や周辺での消費活動も不振と言わざるを得ない状況となっていた<sup>55</sup>。その最中に明治32（1899）年に開催されたパリ万国博で、新たに建設されたエッフェル塔に入場者が殺到するという事態が起きた。エッフェル塔は目新しい娯楽施設としてパリで人気を博したのである。それゆえ、日本においても、万国博覧会の誘客手段として娯楽が有効だと考えられ、主催者たちは産業振興という博覧会本来の主旨とは少しばかり逸脱しながらも、これまで排除されてきた娯楽性を積極的に取り入れていったのである。

明治33（1900）年のパリ万国博は、事務機関として祝祭課が設置され、祝祭空間の演出に力が入られていた。そこで土居は、第五回内国博の興行場の設置のために、パリ万国博を参考にしたのである。土居は明治33年6月にパリに到着し、約1ヶ月間滞在した。その

間に彼は多くの博覧会関係者と交流した。土居は、出品物だけでなく、蠟人形や曲馬などの会場内外の見世物や、市街地がガス灯や電灯で演出された華やかな景観などをつぶさに見て回った。こうして土居は、万国博覧会を盛り上げる見世物やイベントを通じて、その祝祭空間を直に体験し、内国博でそうした華やかな祝祭空間を実現するためのヒントを学んだのである。そして、そこで得た「学び」を参考に、興行場が設立され、第五回内国博覧会において祝祭空間が演出されていくのである。

## Ⅱ－４．第五回内国博開催

### 第五回内国博の開催

第五回内国博は、明治36（1903）年3月1日より7月31日まで天王寺今宮で開催され、敷地面積、開催日数、出品数などにおいて過去最大の規模を誇り、入場者数は約453万人にのぼった。出品物は、農業及び園芸、林業、水産、採鉱及び冶金、化学工業、染織工業、製作工業、機械、教育学術衛生及経済、美術工芸の10部に分類され、会場に設立された農林館、水産館、工業館、機械館、教育館、美術館、動物館という7つの陳列館、加えて第2会場の堺大浜の水族館で展示が行われた<sup>56</sup>。外国からの出品物を展示する参考館や不思議館、ウォーターシュートのような娯楽施設の開業など、内国博開催以来、初めての事業も行われた。

### 「帝国」の博覧会と大阪

第一回から第四回までの内国博は、殖産興業政策の一環として開催された経済博覧会であり、博覧会の観覧者及び出品者相互間に、技術知識・情報を普及促進させる意義があった<sup>57</sup>。それに対して、第五回内国博は第四回内国博までとは異なる様相が見られた。第五回内国博は、日清戦争での勝利、明治32（1899）年の治外法権撤廃といった出来事に伴う日本の国際的な地位向上を目指して、国家の威信を内外に知らしめる博覧会として認識されたのである<sup>58</sup>。この様相がよく表れているのは、前回までの内国博まで出品が認められていなかった外国製品が、初めて登場した点である。外国製品を多数展示することによって、明治政府は諸外国と日本の産業発展状況を比較しようとしたのである。第五回内国博では外国製品の展示館として参考館が設立され、外国政府や企業の自主的な出品が行われた。参考館には、イギリス、ドイツ、アメリカ、フランス、ロシアなど18ヶ国が出品し、政府として出品したのはカナダ、清国、韓国、アメリカ・オレゴン州、ハワイ、オランダ領インド、ブラジルで、それ以外は民間企業からの出品であった<sup>59</sup>。また、カナダ政府が独自に建設したカナダ館やアメリカのアンドルス・エンド・ジョージ合同会社など、6つの外国独立館が設置された<sup>60</sup>。さらに欧米各地及び清国、朝鮮といった周辺アジア諸国からの観光客の誘致が本格的に企図された。

以上のことから、日本製品と外国製品を観る人に「比較」させることで、明治以降の日本の産業技術が進歩してきたこと、そして日本も欧米諸国と並ぶ近代国家になり得たことを、訪れた外国観光客に認識させようとしていたことが見てとれる。松田はこのような様相を受けて、「第五回内国博はまさに『帝国』の博覧会であった」と指摘している<sup>61</sup>。第五回内国博が「帝国」の博覧会であったことは大阪にも影響を与えることになった。第五回内国博で外国製品が出品されたことにより、多くの外国人が大阪を訪れることになったため、大阪は外国人から高い評価を得られる都市空間を目指していくようになった。

明治35（1902）年5月3日、博覧会への協力を地元へ訴えかける幻燈会において、当時の

大阪市長・鶴原定吉は「多数の外人来遊する以上は大阪全市は即ち博覧会場なり。換言すれば大阪全市百般の事物を硝子箱に入れ、これを世界衆目の前に出陳されたりと思はざるべからず」<sup>62</sup>と演説した。つまり、大阪で暮らす人々も含めた全てのものが「展示品」であり、世界中の人々の前に「展示」されているという認識をもつことを市民に求めたのである。

また、同年4月に開催された幻燈会で大阪市助役・菅沼達吉は「我帝国は、(中略) 宇内環視の下に開かるべき我第五回博覧会は諸外国の注意を惹く事頗る深かるべし。(中略)、帝国商都として否東洋の商都として我大阪市其物をも博覧会に出陳し広く世界に広告せざるべからず(後略)」<sup>63</sup>と演説した。このことから、菅沼も博覧会開催に伴い、大阪自体を「展示」することを契機に、大阪という都市をいかなる都市に発展していくべきかを述べ、そして、「東洋の商都」への発展が、大阪の近未来像として提示されたのである<sup>64</sup>。この近未来像は、第五回内国博後の大阪港築港事業のような具体的な施設整備に、より実体化されていくことになる。

### 第五回内国博の興行物

さて、第五回内国博において最も人々の注目を集めたのは、不思議館やウォーターシュートなどの興行物である。会場に設置された興行物で最も収益を上げたのは「不思議館」であった。不思議館は明治33(1900)年のパリ万国博で好評であった「パレードプチック(Palais de l'Optique)」を模倣した施設である。施設内には無線電信、X線、活動大写真などが設置され、またアメリカの女優カーマン・セラによる電気の舞が演じられた。舞は(1)モーニング・グローリー(朝の舞)、(2)ナイト(夜の舞)、(3)リリー(百合舞)、(4)ファイヤ(火の舞)<sup>65</sup>の4種類があった。カーマン・セラが華麗な衣装を着て、電気光線に照らされ舞う姿は人々を魅了し、人気を集めたのである。他にもメリーゴーランドやウォーターシュートといった遊戯装置の設置、演舞会や楽隊の演奏など、博覧会を盛り上げる見世物や催事が行われた。また娯楽施設ではないが、日本の大林組が出展した「大林高塔」は大阪で初めてエレベータが設置された建物であり、多くの人々が訪れ、大阪を一望のもとに見渡せる景色を楽しんだ。

そして、開会から1ヶ月が経過した4月1日から内国博では初めての夜間開場が行われ、会場内はパビリオンに飾られたイルミネーションや噴水の電燈によって光輝く空間となった。その光景を見た人々について、『大阪朝日新聞』(明治36(1903)年4月2日)の「夜間会場の第一夜」という記事では、「暗中に明星の宮殿のみを現出したる大美観には、群集一時の踊り上り、動揺めき会うて拍手喝采し、暫くは恍然として賛美する声のみなりき」<sup>66</sup>と述べられ、人々は電気の明るさに感嘆し、その華やかな空間を堪能していたことが伺える。

このように、興行物や夜間のイルミネーションを目当てとした多くの人々が第五回内国博を訪れ、結果的に前回までの入場者数を大きく上回ったことから、開催前に博覧会協賛会が興行物によって誘客するという手法は、大成功を収めたといえる。興行物は第五回内国博の大盛況に貢献し、昼夜を問わず人々で賑わう祝祭空間を演出したのである。

### 消費空間と「豊かさ」の提示

第五回内国博は初めて娯楽性が積極的に取り入れられた博覧会であったが、吉見俊哉は第五回内国博から始まった博覧会の娯楽化傾向について、「次第に生産の場よりも、消費の場に対してモデル的な役割を果たしていくようになる」<sup>67</sup>と指摘している。

ここでいう「消費の場」とは、人々が実際に何らかの活動を行う場所、生活をする場所だといえる。したがって、博覧会は人々に理想的な生活を提示する役割を担うようになったといえることができる。さらに博覧会は、便利で豊かな生活様式を提示することで、人々に新しい生活様式への憧れや関心を持たせて、「消費」行動を駆り立てたのである。

実際、大正期以降には全国各地で「婦人」や「こども」、「家庭」をテーマとした博覧会が多く開催され、狭くても無理なく炊事できそうな台所や、より衛生的で合理的な洗濯法の実験室など、生活をより便利で豊かなものにする品々が展示された。ただ、博覧会による「豊かさ」の提示は、既に第五回内国博において示されていたのではないかと考える。事例として第五回内国博の夜間のイルミネーションを挙げ、明らかにしたい。

第五回内国博では、夜間のイルミネーションは電飾や電燈など、「電気」を使って光るのが使用された。電気が日本で実用化されるのは、明治15（1882）年であり、日本初の電力会社である東京電燈会社が銀座で「アーク電燈」を灯したのが最初である。これ以降、東京電燈会社は、電気の普及活動に取り組むようになった。当時のパンフレットに、今日では日用品にすぎない器具が、まるで誇大広告のように宣伝されている<sup>68</sup>ことから、電気がその当時にとって新しい文明の象徴であり、素晴らしいものだと考えられていたことが明らかとなろう。

東京電燈会社の事業以後、技術の改良が重ねられ、電気の力は第五回内国博の会場を眩く照らすイルミネーションの光として、人々の前に表されたのである。そして人々は、電力があれば、夜であっても周囲を無限に明るくできると認識し、やがて、電力がもたらす快適さを得ようとするのである<sup>69</sup>。このことから、夜間のイルミネーションは電気の消費を促す装置であり、電力が人々にもたらしてくれるであろう豊かさを演出していたといえるのではないだろうか。

以上のようなことから、第五回内国博は国家の威信を内外に知らしめる「帝国」の博覧会という側面と、展示を通じて豊かさを提示し、人々に夢を与え、新しい生活様式の実現に駆り立てる「消費空間」の場という側面の二つの面があったといえる。

### 街中の博覧会—百貨店の登場

内国博においては第五回内国博が消費を促す空間であったと論じたが、この空間は都市の中においても存在した。それは百貨店である。百貨店は明治30年代以降、百貨店の先駆けともいえる勧工場にとって代わった。吉見俊哉によれば、それは「都市における商品の常設化されたディスプレイ装置」<sup>70</sup>であり、「広範な商品を店内に展示して、顧客たちのまなざしを誘惑していくようになった」<sup>71</sup>のである。

本節ではまず、百貨店の先駆けである勧工場について、論じていきたい。勧工場とは、明治20年代から30年代にかけて発展し、洋品・小間物・玩具・漆器・絵草紙・履物・時計などの商品を正札つき現金掛値なし<sup>72</sup>で陳列販売していたものである。勧工場は内国博の企図を引き継ぐもの、つまり、「常設化された博覧会空間」として考えられ、民衆に商品を比較させ、選別する視線を教えることを目的としていた。その後、勧工場は明治30年代前半まで全盛を誇っていたが、20世紀に入ると百貨店が登場し、急速に衰退していった。

勧工場に代わり、展示装置として百貨店が台頭したが、その先導となったのは三越である。明治28（1895）年、店舗の一部で陳列販売を始めた三越は、「良賈は深く蔵す」式の伝統的



小売方式から脱却しようとしていた。明治 33 (1900) 年には陳列販売を全店で行うようになり、同時に呉服切手 (商品券) の発行、ショーウィンドーの設置など、欧米の百貨店を模範に新機軸を打ち出した<sup>73</sup>。その後、明治 37 (1904) 年に三越は本格的な百貨店事業に乗り出し、化粧品・帽子・鞆・貴金属など広範な種類の商品が販売されるようになった。

また、大阪では、明治 31 (1898) 年に開店した高島屋心齋橋店においてショーウィンドーが設置され、商品の展示が行われたので、高島屋心齋橋店もまた、常設化された博覧会空間のひとつだったといえる。その後、高島屋は大正 11 (1922) 年に百貨店となった。その他にも同時期に、そごうや大丸などが呉服店から百貨店へと本格的に転身していき、都市の各所に登場したのである。

以上のことから、博覧会や勸工場、百貨店は明治の民衆が共通の経験を積む場、すなわち、商品を見比べ、その中に「新しさ」を発見し、またそのこと自体を楽しむといった、まなざしの経験の場であったといえることができる。そして、このような視覚的経験の中で、人々の商品への欲求は絶えることはなく、それが人々の消費活動を促していったのである<sup>74</sup>。これまで論じてきたように、内国博には娯楽と消費の空間としての二つの役割があった。そして、それらの役割は、「常設化された博覧会空間」である勸工場に反映され、さらに百貨店に引き継がれた。また、老舗の呉服店であった大丸、高島屋などの百貨店への転身は、商都・大阪に大きな活気をもたらした。そしてこの活気が、次章で論じていく「大大阪」の隆盛と都市文化の発展に繋がるのである。

### Ⅲ 大大阪時代

#### Ⅲ-1. 第五回内国博後の大阪

第五回内国博閉幕後、大阪市では、第五回内国博を契機に構想された「商都の大阪」への発展が目指されていく。また、第五回内国博の開催により、大阪において新たな大衆文化が形成されていく。本章では、まず第五回内国博後から大正初期にかけての大阪の都市計画事業と大衆娯楽の形成について論じ、大阪の近代都市としてのさらなる発展について明らかにしたい。次いで、大正後期から昭和初期にかけて、全国一の繁栄を見せた大大阪の都市文化について取り上げ、本稿のねらいである第五回内国博が大阪の都市文化形成に与えた影響がいかなるものであったかという点について、考察していきたい。

#### 大衆娯楽の定着

明治 36 (1903) 年の第五回内国博閉幕後、明治 37 (1904) 年の日露戦争から大正 3 (1914) 年の第一次世界大戦に至る時期、大阪の近代工業の中心となった紡績業はさらなる発展を遂げ、「東洋のマンチェスター」と称されるほど、工業都市として繁栄していった。また、日露戦争後、金属・機械・造船・鉄鋼といった重工業も発展し、大阪は著しい経済発展を遂げた。

この経済発展に伴い、大阪市の人口が急増した。そして人口の急増は、大阪市の電気鉄道網の形成を促すことになった。特に阪神電鉄や南海鉄道、箕面有馬電気軌道 (現在の阪急電鉄) などの私鉄が多く開業し、新しく開発された郊外にとって不可欠なものとなった。やがて、私鉄経営者は大阪市民の中で第五回博覧会を契機とする大衆娯楽が次第に定着してきたこと

に目をつけた。そして経営の安定性を求めるため、娯楽事業の展開に向けて企業活動が活発化されていく。すなわち、箕面有馬電気軌道創業者・小林一三による宝塚歌劇団・宝塚新温泉の創設や、南海電鉄による大浜公園・浜寺公園をめぐる海水浴場の開発などである。

これらの大衆娯楽の開発は、第五回内国博に登場したウォーターシュートやメリーゴーランドなどの娯楽施設の成功が契機となったものである。これについて、竹村民郎は「博覧会におけるプレジャーランドの成功は、全国にさきがけて、まず関西地方に規格化されたレジャーランドの形成をうながす決定的な契機になった」<sup>75</sup>と指摘している。そして、竹村の述べる「規格化されたレジャーランド」として登場するものが、第五回内国博の跡地に設立された「新世界」であった。

### 大娯楽場—新世界の登場

第五回内国博の閉会后、大阪市は明治36（1903）年9月の市会において、博覧会の跡地を都市公園にする整備計画を決定し、跡地の一部を市有地とし、残りを公園と民間に売却する「公園不用地」とする方針が定められた。この整備計画によって公共の手による健全娯楽の場と、民間の力を導入した「大衆娯楽」という場の建設という、二つの方向性が示されることになる。整備計画は日露戦争勃発により一時中断したが、戦争が終結すると再びスタートした。

明治42（1909）年に跡地の東側に当たる部分に美術館、参考館などが並ぶ天王寺公園が開園した。天王寺公園は当時の大阪市における唯一の本格的な都市公園であった。残りの西側は、阪堺電軌系の大阪土地建物株式会社<sup>76</sup>に賃貸された。この頃、阪堺電軌は南海鉄道と同じ大阪—堺間の乗客獲得について競い合っていた。南海側は始発駅である難波が活動写真館の集合地である千日前や道頓堀などの歓楽街と隣接しているという強みがあった。対する阪堺側も、始発駅である天王寺周辺に千日前に劣らぬ大娯楽場を作ろうと考えた。これを受けて、大阪市も「一大娯楽場」を設備することで、公園と相まって市民の健康と趣味の向上と、地域発展の促進、そして阪堺電鉄の増収を図るという狙いから跡地の西側を賃貸することを決定した。こうして明治45（1912）年7月3日に大衆娯楽地である「新世界」が誕生した。

新世界の南半分には、ルナパークが建設され、園内には奏樂堂・スケーティングホール・埃及（エジプト）館、絶叫マシン「サークリング・ウェーブ」などが設置された。また、活動写真小屋のデザインもアメリカ風のものにされ、新世界の南半分には「まがいもののニューヨーク」<sup>77</sup>が建造された。そして、新世界の中央にはパリのエッフェル塔を模した「通天閣」が建ち、大阪の発展を象徴したのである。またその周りには、大正館や玉手館など11の興行館が建てられ、それを取り巻くように飲食店が置かれた。夜には新世界一帯がイルミネーションによって輝き、通天閣にはサーチライトが当てられ、眩い光の空間となった。新世界の賑わいについて、松葉健は次のように回想している。

新世界へは会社帰りのサラリーマンが飲み、日曜日は家族づれがラヂウム温泉へ（温水プールあり）、毎月一日と十五日は職人さんの休日賑わう。また平日といえども人の波は絶えることがなかった<sup>78</sup>。

以上のことから、新世界が大娯楽場として人々に受け入れられ、繁盛していたことが明らかである。新世界、通天閣やルナパークは、第五回内国博によって大衆娯楽という概念が人々の中に生まれた結果、作られた本格的な遊園地であり、この誕生によって、大阪の娯楽空間は、一段と拡大したのである。

### 活動写真の大衆化と千日前の発展

明治末期の大阪において最も栄えた繁華街は、大阪・ミナミである。ミナミは江戸時代から続く芝居街である道頓堀や戎橋筋・心齋橋筋という伝統的商店街を擁していた。明治末期のミナミの繁栄に大きく貢献したのは、活動写真常設館が集結した千日前である。千日前は活動写真常設館を有する新興娯楽街として、その先駆である東京・浅草<sup>79</sup>に次いで繁栄した街であった。

大阪市における活動写真の大衆化は、第五回内国博会場内の「不思議館」であり、活動写真の一般公開が契機となった。第五回内国博において大多数の入場者が活動写真を実際に見たということが、その後の活動写真の普及に大きく貢献したのである。さらに、日露戦争の勃発によっても活動写真の大衆化が加速した。大阪市内において、日本製および外国製の日露戦争に関する実写フィルムが、興行師によって上映された。日本陸海軍の目覚ましい勝利や軍隊の凱旋によって、大衆の軍国主義への熱気が高揚していたこともあり、活動写真の興行は連日超満員であった。

こうした活動写真興行の上向き傾向とともに、寄席や臨時映写館などが常設映写館へと転向していった。明治40(1907)年には、大阪市千日前に、寄席を改装した第一電器館が、大阪市で最初の活動写真常設館として建てられた。その後も千日前において、活動写真常設館が相次いで軒を並べ、その数は数十軒にのぼった。こうして、活動写真常設館を中心とする新興娯楽街として発展した千日前は、大阪・ミナミを名実ともに大阪市随一の娯楽街として発展させたのである。

さて、この時期、活動写真常設館の設立により、女義太夫、浄瑠璃、講談、落語、音曲などの伝統的娯楽の興行場である寄席が次第に減少していった。当時、最も書生の人気を集めた女義太夫席は次第に後退していった。またかつては「いろは四八座」を誇り、川筋まで芝居茶屋が連なるほどの賑わいを見せた道頓堀の芝居も大衆への影響を弱めていった。他に、関西落語や見世物も次第に衰退していった。竹村民郎は、義太夫や芝居など伝統的大衆娯楽の衰退について、「農業を基調とした伝統社会がしだいに後退したと密接に関わっている」<sup>80</sup>と述べている。この伝統社会の後退は、社会の産業化、都市化が進んだためであり、このことから活動写真の大衆娯楽化は、大阪の都市化、都市化にともなって進展し、新しい時代の大衆娯楽として台頭していったことが明らかとなろう。

以上のことから、明治末期から大正初期の大阪における大衆娯楽の形成と発展について言えば、第五回内国博がその要因の一つであると指摘することができる。それは、大阪に大娯楽場を開発することを促した。それだけでなく、博覧会の展示によって西洋文化と触れることになり、大阪にモダンな西洋の大衆文化が広まるきっかけとなったのである。

## Ⅲ－２．大大阪の形成

### 関一の登場と都市計画事業

大正時代に入ると、大阪では都市計画事業の構想がなされた。都市計画において特に問題となったのは、市街地の道幅である。

大阪の市街地は道幅が狭く、比較的街路が整備されている船場・島之内でさえ、東西の道路幅は約7.8メートル、南北の道路幅は約6メートルであり、決して広いとはいえない。明治期になり、人力車などが走るようになると道の狭さは大きな問題となった。この問題を解決するためには大阪の市街地の改造、特に道路の幅を広げる必要があったが、大阪では取り組みが遅れた<sup>81</sup>。

大正3（1914）年7月、当時の市長である池上四郎<sup>82</sup>は、大阪市の新しい都市計画を進めていく上で、客観的に都市問題を捉え、具体的にその方針を示し得る学者が必要だと考えた。そこで助役として、交通経済を専門とする関一を迎えた。大正6（1917）年4月に関一を委員長として都市改良計画調査会が発足し、大阪市の都市計画が本格的に始まった。大正7（1918）年4月に報告書を市長に提供し、都市改良の問題点を明らかにした。その一方で、都市改造のための法律制定について、政府に働きかけが行われた<sup>83</sup>。さらに、大正7年に大阪市の市区改正部を設置した。市区改正部では市街地改造の準備を進め、市区改正設計を作成し、大正8（1919）年12月に内閣の認可を得た。この市区改正設計に基づき、年次計画と財政計画が大正10（1921）年3月に内閣の認可を得た。これが第一次計画事業である。事業の中心は都心の街路の拡幅・新設、橋梁の改築・新築などであり、その中でも最も大きな事業は御堂筋の建設であった。このように関は新しい都市計画を打ち出していったのである<sup>84</sup>。

その後、大正12（1923）年11月30日、関一は第7代大阪市長となった。市長就任後、最も大きい仕事は市域拡張であったが、その後も、関は市営高速鉄道（地下鉄）の建設、都市計画事業の推進など各種の事業に精力的に取り組んだ。都市計画は大正後期に構想され、昭和期に入って実際に動き出した。その事業の中でも早くに実施されたのが、大正14（1925）年4月の第二次市域拡張である。

### 第二次市域拡張の実施

大正14（1924）年4月、第2次市域拡張が実施された。この第2次市域拡張実施の背景には、「第一に明治30（1897）年の第一回市域拡張以後の人口の都市集中進行、第二に市域隣接町村における無秩序な市街地化の進行」があった<sup>85</sup>。第一次市域拡張後、大阪市の人口は約75万人余りであったが、大正7年に2倍を超える163万人に達し、人口密度は1平方キロメートルに2万7900人という史上最高の数字となった。しかし、急激な人口の増大により、教育、保健、交通などの都市施設が追い付かないという問題が浮上した。

関市長はこの問題を受け、『大大阪』において「市域拡張町村編入の必要が漸次に高調せらるるに至ったことは當然」<sup>86</sup>だと述べた。そして、大正10（1920）年7月、大阪市は内務省に大阪市・東成郡・西成郡及び中河内郡矢田・巽・瓜破の山村を都市計画区域として答申した。大阪市は、同年8月に市域変更調査会を組織し、翌11（1922）年9月に西成郡のうち淀川以南、及び東成郡のうち榎本村を除く地域を拡張案とした。この拡張案について西成郡・東成郡ともに全郡編入を求め、大阪市会と大阪府会の協議の結果、大正13（1924）年8月になって両郡編入の合意が成立した。しかし、内務省は市街地化した地域の他は市域への編入を認

めないという方針であった。大阪市と内務省の折衝は難航し、最終的に大阪市案が認められたのは、大正13(1924)年11月のことであり、大正14(1925)年4月1日に東成郡・西成郡が大阪市に編入され、第2次市域拡張が実施されたのである<sup>87</sup>。

この市域拡張により、市域は181.68平方キロメートルに広がり、全国一となった。また人口も211万4,804人(大正14年時点)となり、東京市の199万5,567人を超え、大阪市は全国一、全世界で第6位の人口となった。

### 御堂筋の拡張と地下鉄の建設

御堂筋については、第一次都市計画において、梅田から難波までを繋ぐ南北の幹線道路として、従来の道幅である約6.3メートルから約8倍の43メートルに拡張することが計画された。しかし、大正12(1923)年の関東大震災が起これ、計画が拡大したことによって、その実施については財政上、技術上、困難をとめない、非常に苦心が払われた事業となった。また、大正9(1920)年に施行された都市計画法の適用によってもたらされた都市計画特別税、受益者負担金<sup>88</sup>、固有河岸地収入などの、いずれもが当初の予定を下回った。これによって事業着手が遅れ、御堂筋の着工は大正15(1926)年10月に始まり、完成は昭和12(1937)年5月となった<sup>89</sup>。

次いで、地下鉄の建設について述べておきたい。地下鉄建設計画が具体化したのは、大正9年に大阪市が、帝国鉄道協会及び土木学会に高速鉄道路線網に関する調査を委嘱したときが最初である。同時に大阪市内外高速鉄道調査会が開かれ、大正13(1924)年10月に調査報告が提出され、大阪市における地下鉄の路線網決定の基礎となった。大正14(1925)年に内務省、鉄道省、大蔵省及び大阪府、大阪市関係者が集まって大阪市高速鉄道交通機関協議会を開催し、1号線から4号線の路線網の成案を得た。さらに翌年3月に地下鉄の建設は、大阪市の都市計画事業の一部として執行することに決定し、内閣の認可を得た。

昭和5(1930)年1月に地下鉄工事が着工され、昭和8(1933)年5月20日に梅田と心齋橋間が開通した。地下鉄が開通したことで、人々は梅田と心齋橋間を素晴らしい速さで行き来できることや、豪華なシャンデリア、エスカレータ等を配した駅の見事さに沸き立った。

以上のことから、大阪市は第二次市域拡張によって、全国一の面積と人口を誇ることとなった。しかし、このこと自体は、大阪が「大大阪」と言われた所以ではないと考える。都市計画事業によって御堂筋の拡張や地下鉄の建設など、人々が生活していく上で必要な施設の整備が図られ、人々の生活は便利なものとなった。交通網の拡大によって、人の移動が増え、次に述べるように、心齋橋筋や道頓堀がミナミの繁華街として大いに賑わった。そして、それらが都市の活気を生み出し、文化の形成にも寄与していった。こうした発展が「大大阪」という大阪市の隆盛に繋がっていったのである。

## Ⅲ-3. 大阪市の黄金期—大大阪

### 大大阪時代の心齋橋筋

大正時代以降、関一が主導する都市計画により道路の新設・拡張が実施され、さらに市内各所にビルが建設され始めた。心齋橋筋でも商店のビル化が進んだ。昭和前期にはそごう百貨店がビルを増築し、大丸百貨店も巨大なビルに改築された。他の店舗でも鉄筋コンクリート造3階建程度に改築されるものが多かった。特に、心齋橋より南は呉服・洋服・装身具(ア

クセサリー）などをはじめ高級品・流行品を扱う小売店が多く並び、モダン文化を求める人が集う街となった。

本節では、心齋橋筋における代表的な商店として、「ヨネツ子供服装店」と「松井洋反物店」の二つを挙げたい。明治19（1886）年創業の「ヨネツ子供服装店」は、昭和6（1931）年、鉄筋コンクリート造3階建ての耐震・耐火構造を備えた店舗として改築され、心齋橋筋の中でも最先端の商店建築として注目を浴びた。特に話題を呼んだのは、ショーウィンドーである。ショーウィンドーには、当時のアメリカで流行していた最新の様式が取り入れられ、大阪で初めてとなるマネキンを用いた陳列が行われた。それに次いで明治27（1894）年に創業した「松井洋反物店」の建物は木造2階建てで、一面タイル貼りにする昭和初期の流行を取り入れていた。また、庇や屋根に棧瓦を用い、和風の趣も取り入れていた。瓦とタイルの組み合わせは、伝統が根付く大阪においては珍しく、モダンな商店の特徴といえる。ショーウィンドーにはモスリンなどの反物が吊り下げられていた。

このような心齋橋筋のショーウィンドーを見ながら歩いて回ることは、「心ブラ」と呼ばれた。多くの人々が通りの「ヨネツ子供服装店」や「松井洋反物店」、服地を使った「ニューキモノ」を展示した「鐘紡サービスステーション」や紳士服を販売する「アオキ」など、多種多様な商店のショーウィンドーを見て回った。そして、合間に「心齋橋森永キャンデーストアー」や「不二家洋菓子舗」などのレストラン、カフェ、食堂に入り、休憩することで「心ブラ」を楽しんだのである。さらに夜の心齋橋筋は、商店の看板の明かり、街灯、広告看板のネオンなどで光り輝き、その中を「心ブラ」する人々で賑わっていた。これらのことから、心齋橋筋は昼夜を問わず、多くの人々で賑わっていたことが明らかであり、夜も電気の明かりで光り輝いていた心齋橋筋は、まさに「大大阪」の発展を象徴しているようであったといえる。

また心齋橋筋には、呉服店や扇子などの和物を扱う店と、洋服や帽子など洋物を扱う店の両方があったことから、町の通りにも和装の人と洋装の人、和物や洋物を組み合わせた服装の人が街を歩くといった光景が見られた。先にふれた「松井洋反物店」の建築も、瓦とタイルが組み合わされたモダンなデザインであった。

このようなことから、日本の伝統文化と西洋文化が混在したものが大大阪のモダン文化として成立し、それが心齋橋筋から形成されていったことが指摘できる。

### 心齋橋筋の百貨店

すでに述べてきたように、大大阪時代の心齋橋筋には「大丸」「そごう」などの百貨店が建ち並び、存在感を増していた。本節では「大丸」を挙げて、さらに論を進めたい。

大丸は、昭和3（1928）年に「大丸呉服店」から「大丸」にその名を改めた。そして「生活を文化的、経済的ならしめんとする大衆の欲求を充たすことを以て使命とする」<sup>90</sup>という「百貨店宣言」を行った。昭和8（1933）年には、欧州の百貨店のようなネオ・ゴシック様式の豪華な店舗が完成し、心齋橋筋に面してショーウィンドーが置かれ、その装飾は心ブラを楽しむ人々の目を引いた。

大丸で注目すべき点は、百貨店への誘客を狙う効果的な宣伝や広報である。PR誌「だいまる」では“特選装身具の逸品”、“夏のフタバ会特選の子供服”“婦人洋装と下着”<sup>91</sup>など、大丸で扱う商品が紹介され、この時代の理想的な生活が示された。また、「年末年始 贈答品

の葉」を作り、年末年始の贈答品のような贅沢な商品に対する購買意欲を誘うなど、人々の消費への欲求を高めさせるような工夫が行われた。

さらに大丸は、イベントや文化事業を商いの道具として用いた。これは「大丸呉服店」の頃から行われてきた。例えば、大正13(1924)年3月8日から16日までに開催された「大丸写真競技会」のような市民の作品を募集するコンテスト形式や、同年11月21日から23日に開催された「ボーイスカウト博覧会」のような人々の啓蒙を目的とするイベントなどがある。「大丸」になってからは、朝日新聞社会事業団への義援金募集の広告が出された。また、地下鉄の開通を見越し、心斎橋筋に乗り入れていない京阪電車が豪華な「電車の家」を大丸に開設するなど、企業と協力してイベントが開催された<sup>92</sup>。このようなことが行われたのは、イベントや文化事業を目当てに大丸にやってきた人々に、ついでに大丸で買い物してもらうようにするためである。

以上のことから、大丸百貨店は、大大阪のモダン文化を象徴するだけでなく、人々に理想的な生活を提示し、人々のモダン文化への欲求を刺激する消費空間となっていたことが明らかである。

### 大大阪の道頓堀—松竹座とカフェ

昭和前期、つまり、大大阪時代に入った道頓堀の様子について、日比繁治郎は『道頓堀通』(四六書院, 1930年)の中で「従来芝居町としての盛り場の雰囲気に加えて、大小数十にあまるカフェの進出に據ること無論…」<sup>93</sup>と記している。大大阪時代に入り、道頓堀には芝居の櫓や劇場を擁した芝居町に、カフェという西洋文化が一挙に入ってきたのである。

さらに日比は『道頓堀通』の中で道頓堀のことを、「上は雁治郎の一人九圓の観劇料を支拂ふ芝居があれば、(中略)、…飲食の慾望を満たすに、…十歩を出でずして直ちにその要望に従ふ設備がある。色街は勿論のこと、和洋とりど、おそらくこれほど各階級を一堂に集めたやうな場所が他にあるだらうか」<sup>94</sup>と評している。日比の言葉から分かるように、御堂筋には芝居小屋・活動写真館・料理屋(飲食店)、カフェ(バー)、芝居茶屋などが軒を連ねていた。300年の歴史がある芝居町の風情と、そうした上方の伝統的歓楽街に近代文化が巧みに取り入れられた道頓堀は、「新世界」や千日前の「楽天地」のような電鉄会社などの資本によって作られた歓楽街とは趣が違っていたのは明白であろう。

大大阪時代の道頓堀において、特にこの時代を象徴するものは「松竹座」と「カフェ」である。「松竹座」は大正12(1923)年に開業した道頓堀の活動写真常設館の一つで、洋画専門の封切館として誕生した。正面の半円形の大アーチ、柱の彫刻などのモダンな建築様式が人々の目を引いた。松竹座では諸外国の洋画が日本全国に先駆けて上映されていた。日比の『道頓堀通』には「關西の各常設館の王座に君臨して斷然頭角を抜いてゐる。一日の入場料總計五千圓一萬圓を突破する日さへあるといふ盛況ぶりである」<sup>95</sup>とある。このことから、松竹座が活動写真常設館のうち、関西で最も繁盛していたことが伺えよう。

また、道頓堀における「カフェ」は大正2(1913)年頃に開業された「キャバレー・ド・パノン」がその始まりである。三角屋根の木造三階建てで、コウノトリのランタンやステンドグラスの窓などが飾られ、その雰囲気は「古い佛蘭西のどこかの町の一角にあるやうな趣味的な落ちついた色彩のもの」<sup>96</sup>であったと『道頓堀通』には記されている。「キャバレー・ド・パノン」には客が多く集まったが、昭和期に入り「大カフェ」が進出してくると、客足は次第に衰え

ていった。昭和期になって現われた大カフェの様子について、『道頓堀通』には、「色ガラスと蓄音機の音楽を色彩に、チラ、と白粉の濃い女を窓から覗」<sup>97</sup>くと記されている。このことから、大カフェは「キャバレー・ド・パノン」とは異なり、色とりどりの光の空間の中で、綺麗な容姿の女給とお酒を楽しむところであったことが分かる。

以上のことから、大大阪時代の道頓堀では、特に大衆に向けた娯楽文化が発展してきたことが読みとれる。道頓堀では、江戸時代から続く芝居や茶屋などの伝統的な娯楽文化と、活動写真やカフェのような近代の娯楽文化の両方が存在し、どちらも衰退することなく繁栄を見せた。道頓堀もまた、伝統的な日本文化とモダンな西洋文化が混在する場所であったといえよう。

## おわりに

これまで論じてきたように、江戸期の大坂では、市中に張り巡らされた交通網を通じ、全国から多種多様な商品が集まり、江戸に運び出されていった。大坂は「天下の台所」として発展していったのである。この頃の心齋橋筋は新町ができたことにより、新町と道頓堀を往来する人々で賑わっていた。賑わいによって、心齋橋筋には着物や日用品の商店、蕎麦屋などの食事処が立ち並ぶようになり、心齋橋筋は早くから庶民が買い物や食を楽しむ街となったのである。明治期に入り、一時は経済状況が苦しくなったが、五代友厚の事業活動<sup>98</sup>や紡績業を中心とした工業の発展により、大阪の経済は著しく発展した。また、川口には外国人居留地が建設され、そこから西洋文化が流入した。これにより西洋の商品を扱う店や蒸気船や鉄道、西洋の建築様式の建造物等、市内に西洋文化を象徴するものが次々に登場し、生活の西洋化・都市の近代化が進んだ。

第二章で論じたように、明治政府は近代化政策の一つとして殖産興業政策を掲げ、その政策の一つとして博覧会の開催を決定し、明治10（1877）年の第一回内国博を皮切りに、計5回の内国博を開催した。内国博はその目新しさによって多くの人々を集め、またその周囲にも大きな経済効果を与えた。地方は内国博によってもたらされる経済波及効果に注目し、内国博の誘致に向けての運動が各地で起こった。大阪市も例外ではなく、内国博開催に向けて、経済や工業の発展、運輸の利便性などから、大阪が日本経済の中心であることを誘致運動の中で強く主張した。そして明治36（1903）年に、念願である第五回内国博を開催することになったのである。

第五回内国博は世界に日本の国威を内外に知らしめるための博覧会であった。そこでは、外国製品が日本の製品と比較するために展示され、さらに外国からの誘客も図られた。大阪市はこれを受けて、外国人から高い評価を受けるような都市の近未来像を構想した。この近未来像に向けて、大正期には関一が主導する都市計画事業が展開されていき、「大大阪」が誕生したのである。

また、第五回内国博では新たに娯楽要素が積極的に取り入れられた。不思議館やウォーターシュートなどの娯楽施設や見世物は人の娯楽への欲求を刺激した。これらの娯楽施設は大阪市民の中に大衆娯楽の定着を促し、「新世界」のような大娯楽場や、千日前の活動写真館などの大衆娯楽の形成と発展に繋がったのである。そして、第五回内国博の夜のイルミネーションは、人々に電気を消費することで、快適で新しい生活を得ることができるという意識を持



たせた。すなわち、博覧会の娯楽化は人々の消費への欲求を高めることになったのである。第三章で述べたように、その後も、心齋橋筋には百貨店、呉服店や洋服店、レストランなどが建ち並び、買い物や食事を楽しむ人、「心ブラ」を楽しむ人で賑わった。また道頓堀には、伝統的な芝居の櫓と活動写真常設館やカフェが誕生し、大阪・ミナミの店々は大衆娯楽を楽しむ人で繁盛した。このように、大大阪では「消費」と「娯楽」の文化が相互に影響を与え合いながら発展し、また、日本の伝統的な文化とモダンな西洋文化が混在していた。これらが、大阪時代を象徴する新しい文化として成立したのである。

本稿のねらいは第五回内国博を中心に、この博覧会が大大阪時代の都市文化の形成にどのような影響を与えたのかを明らかにすることであった。

第五回内国博の開催が大阪にもたらした影響としては、次の三つの点があげられよう。第一に、大阪の人々の意識改革である。第五回内国博は国威を示すという「帝国」の博覧会である。大阪においても「帝国」の博覧会の開催地として、外国から評価されるに値する理想の都市であらねばならないという意識改革に繋がった。この改革によって構想された近未来像の構想は、具体的な動きとして関一の都市計画事業に反映され、全国一の都市としての規模と繁栄を誇った「大大阪」が誕生したのである。第二に、大衆娯楽の発展である。第五回内国博の娯楽施設は、人々の中に大衆娯楽を定着させた。また、不思議館で上演された活動写真のように、娯楽施設を通じて新たな娯楽文化が形成されていった。ミナミでは、新世界のような大娯楽場が作られ、活動写真常設館が開設されていったのである。そして第三には、人々の消費への欲求を高めたことである。特に、夜のイルミネーションは、電気を消費することで便利で快適な生活を実現できることを、人々に認識させた。それはやがて人々に、消費することによって「豊かさ」を得ることの喜びを感じさせていった。

「大大阪」時代は、第五回内国博によって構想された商都・大阪の近未来像そのものであった。大衆娯楽や人々の消費活動によって支えられた都市文化は、第五回内国博閉幕後の大阪に受け継がれた。「大大阪」がもたらした都市文化は、経済的繁栄だけでなく、大阪の人々の生活に彩りや愉しみをもたらし、以上の点から、第五回内国博は大大阪において、都市文化を生み出すための土壌を創り出し、その後の大阪における都市発展と文化形成に大きな影響を与えたといえることができる。

## 注

- <sup>1</sup> 本節のみ「大坂」と表記する。
- <sup>2</sup> 堀川は、豊臣秀吉が城下町を上町台地の西側に拡張する際に、土地の造成が必要であり、その土の確保のために開削されてできたもの。豊臣時代に東横堀、天満堀川、西横堀、阿波座堀、道頓堀ができた。さらにこの計画により北船場が開かれた。江戸時代に入り、元和から寛永年中に京町堀、江戸堀、海部堀、長堀、立売堀、薩摩堀などが集中して掘られ、元禄11(1698)年の堀江川の開削によって完成を見ている。また、秀吉の町づくりの計画は徳川幕府が継承し、島之内や南船場・西船場が次々と開かれた(相蘇一弘「近世の心齋橋筋」(橋爪紳也監修『心齋橋筋の文化史』心齋橋筋商店街振興組合、1997年、所収、91頁)。
- <sup>3</sup> J. L. マクレイン「十七世紀の大坂」(脇田修・J. L. マクレイン編『国際交流フォーラム 近世の大坂』大阪大学出版会、2000年、所収、44-45頁)
- <sup>4</sup> 相蘇一弘、前掲書、92頁

- <sup>5</sup> 新町橋から五幸町・初瀬町・浄国寺町を経て順慶町5丁目で、心齋橋筋に出、右に折れて心齋橋筋を渡ればやがて戎橋に至る通りのこと（相蘇一弘、同上書、94頁）。
- <sup>6</sup> 西口忠「心齋橋筋の由来と明日の心齋橋筋」（『大阪春秋』第86号、大阪春秋社、1997年、所収、14頁）。
- <sup>7</sup> 『撰津名所図会大成』（秋里籬島、田村九兵衛、1798年）において「呉服・木綿屋、家具調度、囊物あり、楊枝屋あり、婦女子の髪飾具、或ハ世帯の荒道具、神棚宮屋のとなりにハ仏具屋あり、陶器、金物、打物、蓑笠合羽、傘屋、下駄草履、煮売焼売の魚、鮓店、野菜、菓子、饅頭・餅・煎餅に板行店、いふとも尽きぬ」と記されている（相蘇一弘、前掲書、94頁）。
- <sup>8</sup> 同上書、94頁
- <sup>9</sup> 同上書、95頁
- <sup>10</sup> 横山好三『大阪都市形成の歴史』、文理閣、2011年、161頁
- <sup>11</sup> 慶応3（1867）年7月頃、三河地方の宿場町やその近くで伊勢神宮などのお札（新符）が降り、それをきっかけとして御祭騒ぎが伝播していった（大阪市史編纂所編『大阪市の歴史』、創元社、1999年、220頁）。
- <sup>12</sup> 本章より「大阪」と表記する。
- <sup>13</sup> 大阪都市協会編『近代大阪の五十年』大阪都市協会、1976年、21頁
- <sup>14</sup> 同上書、22頁
- <sup>15</sup> 大阪市史編纂所、前掲書、261-262頁
- <sup>16</sup> 薩摩藩出身。明治初期の実業家。五代は早くから西欧文化に触れていた。慶応元（1865）年に薩摩藩留学生の引率者としてヨーロッパ諸国を訪れた。この洋行でイギリスのマンチェスターやバーミンガムで紡績機械や武器を購入し、この紡績機械は薩摩藩の紡績所に据え付けられ、これは日本最初の洋式紡績機械となった。慶応4（1868）年には大阪の開港、貿易事務を管理することとなり、これを機に大阪の文明開化、経済発展に貢献するような事業を展開していった（宮本又郎『江戸から明治へ～変革期の企業家たち一五代友厚・広瀬幸平・藤田伝三郎展資料一』、大阪企業家ミュージアム発行、2008年、4-7頁）。
- <sup>17</sup> 明治・大正期の実業家・銀行家。慶応3（1867）年に渡欧し、フランスで西欧文明と西洋式経営を学んだ。明治維新後は大蔵省に身を置き、国立銀行条例を整備し、また辞職後は第一国立銀行を設立するなど近代日本の財政、金融、貨幣制度の導入に尽力した。さらに大坂紡績会社をはじめとする民間の産業、銀行及び実業家団体の育成と指導も行った（横山好三『大阪都市形成の歴史』、文理閣、2011年、178-180頁）。
- <sup>18</sup> 安治川と木津川に再分流する位置に存在した。
- <sup>19</sup> 川口居留地の設置は、慶応3（1867）年4月13日に「兵庫港并大阪に於て外国人居留地を定むる取極」を諸外国と結んだことで決定された。その後、慶応4（1868）年7月29日、居留地の区画について競売が行われ、26区画が落札された。その後、居留地の住民から居留地の拡充が求められ、最終的に居留地には36の区画が存在していた。各区画には西洋風の家屋が建ち、街路樹にユーカリやゴムなどが植えられ、各所に街灯が配された。さらにキリスト教の宣教師が住むようになり、キリスト教伝道の一環として教会や学校も建てられ、異国情緒溢れる街となった（堀田暁生・西口忠『大阪川口居留地の研究』、思文閣出版、3-34頁）。
- <sup>20</sup> イギリスの技師。イギリスの植民地（オーストラリア、セイロン）で土木、炭鉱などの技

師を務める。その後、明治3(1870)年4月に民部省に鉄道建築師長として招かれ、東京—横浜間の鉄道敷設事業に尽力した(老川慶喜『日本鉄道史 幕末・明治篇』、中央公論新社、2014年、48-49頁)。

<sup>21</sup> 大阪市史編纂所編、前掲書、239-240頁

<sup>22</sup> 例えば、阪堺鉄道(現在の南海鉄道となる)敷設に関わった松本重太郎や藤田伝三郎、大阪鉄道(後に国鉄となり、現在はJR西日本関西本線となる)の設立に関わった岡橋治助や竹田忠作が挙げられる(武知京三『都市近郊鉄道の史的展開』、日本経済評論社、1986年、139-140頁、152-153頁)。

<sup>23</sup> 大阪初の私設鉄道は阪堺鉄道で、明治18(1885)年12月29日に難波・大和川間の営業を開始し、その後明治21(1888)年、堺にまで延長された。また明治22(1889)年に湊町・柏原間の運航を開始した大阪鉄道がある(武知京三、前掲書、142頁、153頁)。

<sup>24</sup> 橋爪節也『モダン心斎橋コレクション メトロポリスの時代と記憶』国書刊行会、2005年、24-25頁

<sup>25</sup> 西口忠「心斎橋筋の由来と明日の心斎橋筋」(大阪春秋編集室編『大阪春秋』第86号、大阪春秋社、所収、17頁)

<sup>26</sup> 福沢諭吉「西洋事情初編 卷之一」(慶應義塾編纂『福沢諭吉全集』第1巻、岩波書店、1969年、所収、312頁)

<sup>27</sup> 吉見俊哉『博覧会の政治学』講談社、2010年、124-125頁

<sup>28</sup> 久米邦武／水澤周訳『特命全権大使米欧回覧実記：現代語訳』第5巻、慶應義塾大学出版会、2008年、46頁

<sup>29</sup> 國雄行、『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年、67-68頁

<sup>30</sup> 同上書、69頁

<sup>31</sup> 明治5(1872)年には京都、和歌山、岡崎、土浦、高知で、明治6(1873)年には京都、茨城、福岡、松本、鳥根で、明治7(1874)年には京都、名古屋、新潟、金沢でというように、現在記録に残っているだけでも毎年、様々の地方で地方博覧会が開催されている(吉見俊哉、前掲書、130頁)。

<sup>32</sup> 普段は公開しない寺の秘仏を一定期間公開すること。

<sup>33</sup> 薬用となる動植物・鉱物をはじめ、あらゆる自然の産物や珍しい品物を一堂に集めて、品評や研究をした会。

<sup>34</sup> 吉見俊哉、前掲書、131頁

<sup>35</sup> 同上書、132頁

<sup>36</sup> 鹿児島県は明治10年1月に勃発した西南戦争により出品収集が阻害されたために出品物が無かった(國雄行、前掲書、92-93頁)。

<sup>37</sup> 明治大正期を代表する木彫家。西郷隆盛銅像の製作者として有名である。

<sup>38</sup> 高村光雲、『幕末維新懐古談』、岩波書店、1995年、127頁

<sup>39</sup> 國雄行、前掲書、115頁

<sup>40</sup> 例えば、『朝野新聞』(4月2日付)は、外国の博覧会では遊戯施設が併設されている例をあげ、博覧会は「歓楽場」ではないが、「一般の人々に歓楽を与え、1人でも多く、1回でも多く、会場に出入りさせ、知らず知らずのうちに、有用有益の事物を見物させるようにしなければならぬのではないか」と提言している(同上書、128-129頁)。

- <sup>41</sup> 出品数が減ったのは、当時の機械産業をけん引した三菱造船所や川崎造船所などが日清戦争のための軍需生産による多忙を理由に出品の取り消しが多発したためである（同上書、145-146 頁）。
- <sup>42</sup> 古川武志「大阪と内国勸業博覧会・明治の万博開催へ」（『大阪春秋』第 140 号、新風書房、2010 年、所収、34 頁）。
- <sup>43</sup> 松田京子『帝国の視線—博覧会と異文化表象—』吉川弘文館、2003 年、20 頁
- <sup>44</sup> 山路勝彦『大阪、賑わいの日々 二つの万国博覧会の解剖学』関西学院大学出版会、2014 年、6-7 頁
- <sup>45</sup> 松田京子、前掲書、20-21 頁
- <sup>46</sup> 今宮村とその東の茶臼山周辺において、入り組んだ道路が消去され、区画整理された。さらに天王寺に隣接する貧民窟・「長町」にある道路の拡張と整備が農商務省から要求されていた。しかし多額の費用が掛かることや道路整備によって起こる貧民の暴走をおそれ、府側が道路整備について拒否するなど大阪市と府のすれ違いが起こるといった問題が浮上し、結果的には開催の年である明治 36 年になっても拡張工事は行われなかった（山路勝彦、前掲書、8-16 頁）。
- <sup>47</sup> 第五回内国勸業博覧会協賛会編纂『大阪と博覧會』第五回内国勸業博覧会協賛会発行、1903 年、134 頁
- <sup>48</sup> 同上書、135 頁
- <sup>49</sup> 同上書、135 頁
- <sup>50</sup> 同上書、135 頁
- <sup>51</sup> 同上書、135 頁
- <sup>52</sup> 同上書、135 頁
- <sup>53</sup> 同上書、135 頁
- <sup>54</sup> 同上書、135 頁
- <sup>55</sup> 例えば、明治 26（1893）年のシカゴ万国博は 5,660 万円もの大金を投入したが収入は 3,764 万にとどまり、1,896 万円の大赤字を出した（國雄行、前掲書、157 頁）。
- <sup>56</sup> 第五回内国勸業博覧会協賛会、前掲書、105 頁
- <sup>57</sup> 松田京子、前掲書、16 頁
- <sup>58</sup> 同上書、16-17 頁
- <sup>59</sup> 伊藤真美子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008 年、102-103 頁
- <sup>60</sup> 國雄行、前掲書、187 頁
- <sup>61</sup> 松田京子、前掲書、17 頁
- <sup>62</sup> 同上書、36 頁
- <sup>63</sup> 同上書、37 頁
- <sup>64</sup> 同上書、37 頁
- <sup>65</sup> 國雄行、前掲書、54 頁
- <sup>66</sup> 山路勝彦、前掲書、26 頁
- <sup>67</sup> 吉見俊哉、前掲書、160 頁
- <sup>68</sup> 山路勝彦、前掲書、29 頁
- <sup>69</sup> 同上書、29-30 頁

- <sup>70</sup> 吉見俊哉、前掲書、148 頁
- <sup>71</sup> 同上書、148 頁
- <sup>72</sup> 正札とは掛値なしの値段を書いた札を指し、掛値とは値切られることを予想し、実際の販売価格よりも値段を高くつけることである。つまり現金払いで正札に書かれた値段で販売された。
- <sup>73</sup> 吉見俊哉、前掲書、148-149 頁
- <sup>74</sup> 同上書、151 頁
- <sup>75</sup> 竹村民郎『阪神間モダニズム再考』三元社、2012 年、301 頁
- <sup>76</sup> 明治 34 (1901) 年創立。発起人には伊藤喜十郎、岩本栄之助、大林芳五郎、野村徳七、藤本清兵衛、小林一三ら実業家が揃っていた (同上書、315 頁)。
- <sup>77</sup> 橋爪紳也『大阪モダン 通天閣と新世界』、NTT 出版、1996 年、9 頁
- <sup>78</sup> 松葉健「大正時代の新世界・ルナパーク」(大阪春秋編集室編、『大阪春秋』第 75 号、大阪春秋社、所収、34 頁)
- <sup>79</sup> 明治 36 (1903) 年に日本最初の活動写真常設館である電器館が浅草に設立された (竹村民郎、前掲書、260 頁)。
- <sup>80</sup> 同上書、233 頁
- <sup>81</sup> 大阪において、市街地の改造のための法律面での条件整備は早くから求められていた。大阪府会や大阪市会が要望書や請願書を政府に提出したが、実現には至らなかった。また第一次市域拡張後の明治 34 (1901) 年、大阪市は工学博士の山口半六に設計を委嘱し、具体案も出ていたが、実施されなかった。第一次市域拡張は明治 30 (1897) 年に行われた。この市域拡張によって「市の面積は一挙に 3 倍半 (55 平方キロメートル)、人口も 50 万人から 75 万人に増えた。(中略)、現在の天王寺・都島の一部・福島・此花・港・大正・浪速などの各区がこのとき編入された」と伝えている (三田純市『御堂筋ものがたり』、東方出版、1991 年、44 頁)。
- <sup>82</sup> 会津出身。主に警察官家の職を務め、大阪府警察本部長を長年務めていた。第 5 代肝付兼行市長が辞職したあと、市長候補に推され、大正 2 (1913) 年 10 月に裁可された。(大阪市史編纂所、前掲書、272 頁)。
- <sup>83</sup> 同上書、276 頁
- <sup>84</sup> 同上書、276 頁
- <sup>85</sup> 大阪都市協会、前掲書、32 頁
- <sup>86</sup> 関一「大阪市の諸問題」(『大大阪』、第一巻第一号、大阪都市協会、1925 年、所収、2 頁)
- <sup>87</sup> 大阪市史編纂所、前掲書、278 頁
- <sup>88</sup> 関一は、御堂筋の完成により沿道の両側に続々とビルが建ち、辺り一帯の地価が高騰し、それは周辺の居住者に大きな利益をもたらすはずだと考えた。さらに御堂筋には地下鉄が通り、交通の便という点からの利益も見逃せず、こうした有形無形の利益に対し、周辺の居住者は応分の金を支払うべきであり、市当局はその金をもって工事費の一部に充当するべきであるとした。これが受益者負担の論理である (三田純市、前掲書、54-55 頁)。
- <sup>89</sup> 大阪都市協会、前掲書、48 頁
- <sup>90</sup> 橋爪紳也・田村武「心齋橋におけるイベントと文化事業」、(橋爪紳也監修『心齋橋筋の文化史』、心齋橋筋商店街振興組合、1997 年、所収、164 頁)。

- <sup>91</sup> 橋爪節也『モダン心齋橋コレクション メトロポリスの時代と記憶』、国書刊行会、2005年、82-83頁
- <sup>92</sup> 橋爪紳也・田村武、前掲書、161-166頁
- <sup>93</sup> 和田博文監修『大阪のモダニズム』ゆまに書房、2006年、345頁
- <sup>94</sup> 同上書、348頁
- <sup>95</sup> 同上書、407頁
- <sup>96</sup> 同上書、434頁
- <sup>97</sup> 同上書、436頁
- <sup>98</sup> 金銀分析所をはじめ、鉦山の開発、大阪株式取引所の創立、大阪商法会議所の組織を行うなど、新しい時代に即応した事業を展開し、大阪の企業活動の先駆けとなった（大阪市史編纂所編、前掲書、256-258頁）。

## 参考文献

### —著書—

- 伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、2008年
- 大阪都市協会『大大阪』第一号 第一巻、大阪都市協会、1925年
- 大阪都市協会『近代大阪の五十年』大阪都市協会、1976年
- 大阪市史編纂所『大阪市の歴史』創元社、1999年
- 大阪歴史博物館編『展示の見所⑨「大大阪」の街角 流行の最先端「心ぶら』大阪歴史博物館、2004年
- 大阪府建築士会編『近代大阪の建築—明治・大正・昭和初期—』ぎょうせい、1984年
- 國雄行『博覧会と明治の日本』吉川弘文館、2010年
- 久米邦武／水澤周訳・注『特命全権大使米欧回覧実記：現代語訳』第5巻、慶應義塾大学出版会、2008年
- 第五回内国勸業博覧会協賛会『大阪と博覧會（再版）』第五回内国勸業博覧会協賛会、1903年
- 高村光雲、『幕末維新懷古談』岩波書店、1995年
- 武知京三『都市近郊鉄道の史的展開』日本経済評論社、1986年
- 竹村民郎『阪神間モダニズム再考』三元社、2012年
- 鳥海靖『もういちど読む山川日本近代史』山川出版会、2013年
- 橋爪紳也『絵はがきで読む大大阪』創元社、2010年
- 橋爪紳也『大阪モダン—通天閣と新世界』NTT出版、1996年
- 橋爪紳也『心齋橋筋の文化史』心齋橋筋商店街振興組合、1997年
- 橋爪紳也監修『別冊太陽 日本のこころ 133 日本の博覧会 寺下勅コレクション』平凡社、2005年
- 橋爪紳也『モダニズムのニッポン』、角川学芸出版、2006年
- 橋爪節也『モダン心齋橋コレクション—メトロポリスの時代と記憶』国書刊行会、2005年
- 橋爪節也編著『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の幻像—』創元社、2007年
- 原田伴彦編『町人文化百科論集5 浪花のにぎわい』柏書房、1981年
- 福沢諭吉『西洋事情初編 卷之一』、慶應義塾編纂『福沢諭吉全集』第1巻、岩波書店、1969年
- 松田京子『帝国の視線—博覧会と異文化表象』吉川弘文館、2003年

- 三田純一『御堂筋ものがたり』東方出版、1991年  
宮本又郎『江戸から明治へ～変革期の企業家たち—五代友厚・広瀬宰平・藤田伝三郎展資料—』  
大阪企業家ミュージアム、2008年  
山路勝彦『大阪、賑わいの日々—二つの万国博覧会の解剖学』関西学院出版会、2014年  
横山好三『大阪都市形成の歴史』文理閣、2011年  
吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文館出版、1986年  
吉見俊哉『博覧会の政治学—まなごしの近代—』講談社、2010年  
脇田修・J. L. マクレイン編『国際交流フォーラム 近世の大坂』大阪大学出版会、2000年  
和田博文監修『大阪のモダニズム』ゆまに書房、2006年

—論文—

- 戸田清子「万国博覧会と産業振興—明治期における『工芸』と工業化をめぐる考察—」  
(奈良県立大学『研究季報』第18巻、第3・4合併号、2008年3月、所収)  
戸田清子「近代日本における博覧会の産業振興的役割と意義—ウィーン万国博覧会を中心に—」  
(奈良県立大学研究季報、第20巻第3号『地域創造学研究V』2010年3月、所収)

—雑誌—

- 大阪春秋編集室編『大阪春秋』大阪春秋社、第75号（1994年6月発行）  
同、第86号（1997年3月発行）  
同、第102号（2001年3月発行）  
長山公一編・著『大阪春秋』新風書房、第131号（2008年7月発行）  
同、第140号（2010年10月発行）

—ウェブサイト—

- なんば戎橋筋商店街（2015年10月7日取得）  
[http://www.ebisubashi.or.jp/tourist\\_information.html](http://www.ebisubashi.or.jp/tourist_information.html)